

甲南医療センター 内科専門研修プログラム

目次

プログラムの理念・使命・特性	1
専門研修プログラム管理委員会	34
専攻医研修マニュアル	35
指導医マニュアル	52
モデルプログラム	
(内科基本コース)	54
(Subspecialty 重点コース 循環器内科)	57
(Subspecialty 重点コース 腎臓内科)	59
(Subspecialty 重点コース 血液内科)	61
(Subspecialty 重点コース 消化器内視鏡)	62

文中に記載されている資料『専門研修プログラム整備基準』『研修カリキュラム項目表』『研修手帳(疾患群項目表)』『技術・技能評価手帳』は、日本内科学会 Web サイトにてご参照ください。

公益財団法人甲南会 甲南医療センター 内科専門研修プログラム

1.理念・使命・特性

理念【整備基準 1】

- 1) 本プログラムでは、神戸市東灘区の地域の基幹病院である甲南医療センターを基幹施設として、兵庫県神戸市東灘区医療圏・近隣医療圏にある連携施設と協力して内科専門研修を行います。甲南医療センターは昭和 9 年に当地に開院して以来、病院の創立者である平生鈇三郎の思いである「人類愛の精神に基づき、悩める病人のための病院たらん」を基本理念として、質の高い医療を提供できる病院として在り続けたいと願っています。また、東灘区医療圏の医療事情を理解し、地域の実情に合わせた実践的な医療も行えるように訓練し、内科専門医としての基本的臨床能力獲得後はさらに高度な総合内科の Generality を獲得する場合や内科領域 Subspecialty 専門医への道を歩む場合を想定して、複数のコース別に研修をおこなって内科専門医の育成を行います。
- 2) 初期臨床研修を修了した内科専攻医は、本プログラム専門研修施設群での 3 年間(基幹施設 2 年間+連携施設)に豊富な臨床経験を持つ指導医の適切な指導の下で、内科専門医制度研修カリキュラムに定められた内科領域全般にわたる研修を通じて、標準的かつ全人的な内科的医療の実践に必要な知識と技能とを修得します。

内科領域全般の診療能力とは、臓器別の内科系 Subspecialty 分野の専門医にも共通して要求される基礎的な診療能力を指します。また、知識や技能に偏らずに、患者に人間性をもって接すると同時に医師としてのプロフェッショナリズムとリサーチマインドの素養をも修得して可塑性が高く様々な環境下で全人的な内科医療を実践する先導者の持つ能力です。多くの患者に対する診療を通して、これらを習得するよう努めます。

使命【整備基準 2】

- 1) 内科専門医として、(1)高い倫理観を持ち、(2)最新の標準的医療を実践し、(3)安全な医療を心がけ(4)プロフェッショナリズムに基づく患者中心の医療を提供し、臓器別専門性に著しく偏ることなく全人的な内科診療を提供すると同時にチーム医療を円滑に運営できる研修を行います。
- 2) 本プログラムを修了し内科専門医の認定を受けた後も、内科専門医は常に自己研鑽を続け、最新の情報を学び、新しい技術を修得し、標準的な医療を安全に提供し、疾病の予防、早期発見、早期治療に努め、自らの診療能力をより高めることを通じて内科医療全体の水準をも高めて、地域住民、日本国民を生涯にわたって最善の医療を提供してサポートできる研修を行います。
- 3) 疾病の予防から治療に至る保健・医療活動を通じて地域住民の健康に積極的に貢献できる研修を行います。
- 4) 将来の医療の発展のためにリサーチマインドを持ち臨床研究、基礎研究を実際に行う契機となる研修を行います。

特性

- 1) 本プログラムは、神戸市東灘区の地域の基幹病院である甲南医療センターを基幹施設として、兵庫県神戸市東灘区医療圏、近隣医療圏をプログラムとして守備範囲とし、必要に応じた可塑性のある、地域の実情に合わせた実践的な医療も行えるように訓練されます。研修期間は基幹施設 2 年間+連携施設 1 年間の 3 年間です。
- 2) 本研修プログラムでは、症例のある時点で経験するというだけでなく、主担当医として、入院から退院(初診・入院～退院・通院)まで可能な範囲で経時的に、診断・治療の流れを通じて、一人一人の患者の全身状態、社会的背景・療養環境調整をも包括する全人的医療を実践します。そして、個々の患者に最適な医療を提供する計画を立て実行する能力の修得をもって目標への到達とします。
- 3) 基幹施設である甲南医療センターでの 2 年間(専攻医 2 年修了時)で、「研修手帳」に定められた 70 疾患群のうち、少なくとも通算で 45 疾患群、120 症例以上を経験し、日本内科学会専攻医登録評価システムに登録できます。そして、専攻医 2 年修了時点で、指導医による形式的な指導を通じて、内科専門医ボードによる評価に合格できる 29 症例の病歴要約を作成できます。
- 4) 連携病院が地域においてどのような役割を果たしているかを経験するために、原則として 1 年間、立場や地域における役割の異なる医療機関で研修を行うことによって、内科専門医に求められる役割を実践します。
- 5) 専攻医 3 年修了時で、「研修手帳」に定められた 70 疾患群のうち、少なくとも通算で 56 疾患群、160 症例以上を経験し、日本内科学会専攻医登録評価システム(仮称)に登録できる体制とします。そして可能な限り、「研修手帳」に定められた 70 疾患群、200 症例以上の経験を目標とします。

専門研修後の成果【整備基準 3】

- 1) 地域医療における内科領域の診療医(かかりつけ医):地域において常に患者と接し、内科慢性疾患に対して、生活指導まで視野に入れた良質な健康管理・予防医学と日常診療を実践します。
- 2) 内科系救急医療の専門医:内科系急性・救急疾患に対してトリアージを含めた適切な対応が可能な、地域での内科系救急医療を実践します。
- 3) 病院での総合内科(Generality)の専門医:病院での内科系診療で、内科系の全領域に広い知識・洞察力を持ち、総合内科医療を実践します。
- 4) 総合内科的視点を持った Subspecialist:病院での内科系の Subspecialty を受け持つ中で、総合内科(Generalist)の視点から、内科系 Subspecialist として診療を実践します。

本プログラムでは甲南病院を基幹病院として、多くの連携施設と病院群を形成しています。複数の施設での経験を積むことにより、様々な環境に対応できる内科専門医が育成される体制を整えています。

2.内科専門医研修はどのように行われるのか[整備基準:13~16、30]

- 1) 研修段階の定義:内科専門医は 2 年間の初期臨床研修後に設けられた専門研修(専攻医研修)3 年間の研修で育成されます。
- 2) 専門研修の期間は,それぞれ医師に求められる基本的診療能力・態度・資質と日本内科学会が定める「内科専門医研修カリキュラム」(別添)にもとづいて内科専門医に求められる知識・技能の修得目標を設定し、基本科目修了の終わりに達成度を評価します。具体的な評価方法は後の項目で示します。
- 3) 臨床現場での学習:日本内科学会では内科領域を 70 疾患群(経験すべき病態等を含む)に分類し、代表的なものについては病歴要約や症例報告として記載することを定めています。日本内科学会専攻医登録評価システム(仮称以下、「専攻医登録評価システム」)への登録と指導医の評価と承認によって目標達成までの段階を uptodate に明示することとします。各年次の到達目標は以下の基準を目安とします。

○専門研修 1 年

- 症例:カリキュラムに定める 70 疾患群のうち、20 疾患群以上を経験し、専攻医登録評価システムに登録することを目標とします。
- 技能:疾患の診断と治療に必要な身体診察、検査所見解釈、および治療方針決定を指導医とともに行うことができるようにします。
- 態度:専攻医自身の自己評価、指導医とメディカルスタッフによる 360 度評価とを複数回行って態度の評価を行い担当指導医がフィードバックを行います。

○専門研修 2 年

- 疾患:カリキュラムに定める 70 疾患群のうち、通算で 45 疾患群以上を(できるだけ均等に)経験し、日本内科学会専攻医登録評価システム(仮称)に登録することを目標とします。
- 技能:疾患の診断と治療に必要な身体診察、検査所見解釈、および治療方針決定を指導医の監督下で行うことができるようにします。
- 態度:専攻医自身の自己評価、指導医とメディカルスタッフによる 360 度評価を複数回行って態度の評価を行います。専門研修 1 年次に行った評価についての省察と改善とが図られたか否かを指導医がフィードバックします。

○専門研修 3 年

- 疾患:主担当医として、カリキュラムに定める全 70 疾患群、計 200 症例の経験を目標とします。但し、修了要件はカリキュラムに定める 56 疾患群、そして 160 症例以上(外来症例は 1 割まで含むことができる)とします。この経験症例内容を専攻医登録評価システムへ登録します。既に登録を終えた病歴要約は、日本内科学会病歴要約評価ボード(仮称)による査読を受けます。
- 技能:内科領域全般について、診断と治療に必要な身体診察、検査所見解釈、および治療方針決定を自立して行うことができるようにします。
- 態度:専攻医自身の自己評価、指導医とメディカルスタッフによる 360 度評価を複数回行って態度の評価を行います。専門研修 2 年次に行った評価についての省察と改善とが図られたか否かを指導医がフィードバックします。また、基本領域専門医としてふさわしい態度、プロフェッショナリズム、自己学習能力を修得しているか否かを指導医が専攻医と面談し、さらなる改善を図ります。

<内科研修プログラムの週間スケジュール:糖尿病内科の例>

各曜日 午前 主治医団チームカンファレンス、病棟ラウンド
月曜日 午後 新患カンファレンス
火曜日 午後 糖尿病患者カンファレンス
水曜日 午後 NST 回診
木曜日 午後 糖尿病病棟カンファレンス (第 4 木曜)
糖尿病センター チームカンファレンス (第 2 木曜)
金曜日 午前、午後 超音波検査(腹部、心臓、甲状腺、頸動脈)、PWV、ABI、神経伝道速度など
午後 指導医カルテ診(weekly discussion)

糖尿病教室(1 回/2 ヶ月)

糖尿病教育入院(2 週間/月)

外来(1 回/週)

なお、専攻医登録評価システムの登録内容と適切な経験と知識の修得状況は指導医によって承認される必要があります。

【専門研修 1-3 年を通じて行う現場での経験】

- ① 専攻医 2 年目以降から初診を含む外来(1 回/週以上)を通算で 6 カ月以上行います。
- ② 当直を経験します。

4) 臨床現場を離れた学習

①内科領域のトピックス、②最新のエビデンスや病態・治療法について専攻医対象のセミナーが定期開催されており、それを聴講し、学習します。内科系学術集会、JMECC(内科救急講習会)等においても学習します。

5) 自己学習

研修カリキュラムにある疾患について、内科系学会が行っているセミナーの DVD やオンデマンドの配信を用いて自己学習します。個人の経験に応じて適宜 DVD の視聴ができるよう図書館または IT 教室に設備を準備します。また、日本内科学会雑誌の MCQ やセルフトレーニング問題を解き、内科全領域の知識のアップデートの確認手段とします。週に 1 回、指導医との Weekly summary discussion を行い、その際、当該週の自己学習結果を指導医が評価し、研修手帳に記載します。

6) Subspecialty 研修

後述する”各科重点コース”において、それぞれの専門医像に応じた研修を準備しています。Subspecialty 研修は 3 年間の内科研修期間の、いずれかの年度で最長 1 年間について内科研修の中で重点的に行います。大学院進学を検討する場合につきましても、こちらのコースを参考に後述の項目 8(P.8、9)を参照してください。

3.専門医の到達目標項目 2-3)を参照[整備基準:4, 5, 8~11]

- 1) 3年間の専攻医研修期間で、以下に示す内科専門医受験資格を完了することとします。
 - ① 70に分類された各カテゴリーのうち、最低56のカテゴリーから1例を経験すること。
 - ② 日本内科学会専攻医登録評価システムへ症例(定められた200件のうち、最低160例)を登録しそれを指導医が確認・評価すること。
 - ③ 登録された症例のうち、29症例を病歴要約として内科専門医制度委員会へ提出し、査読委員から合格の判定をもらうこと。
 - ④ 技能・態度:内科領域全般について診断と治療に必要な身体診察、検査所見解釈、および治療方針を決定する能力、基本領域専門医としてふさわしい態度、プロフェッショナルリズム、自己学習能力を修得すること。

なお、習得すべき疾患、技能、態度については多岐にわたるため、研修手帳を参照してください。

2) 専門知識について

内科研修カリキュラムは総合内科、消化器、循環器、内分泌、代謝、腎臓、呼吸器、血液、神経、アレルギー、膠原病および類縁疾患、感染症、救急の13領域から構成されています。甲南医療センターには9つの内科系診療科(総合内科、内分泌・代謝内科、消化器内科、循環器内科、腎臓内科、神経内科、血液内科、呼吸器内科、緩和ケア内科)が複数領域を担当しています。また、救急疾患は各診療科によって管理されており、甲南医療センターにおいては内科領域全般の疾患が網羅できる体制が敷かれています。これらの診療科での研修を通じて、専門知識の習得を行ないます。さらに関連施設の神戸大学医学部附属病院と神戸市立医療センター中央市民病院、加古川中央市民病院、神鋼記念病院、神戸赤十字病院、千船病院、大阪市立総合医療センター、淀川キリスト教病院、六甲アイランド甲南病院を加えた専門研修施設群を構築することで、より総合的な研修や地域における医療体験が可能となります。患者背景の多様性に対応するため、地域での研修を通じて幅広い活動を推奨しています。

4.各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得[整備基準:13]

- 1) 朝カンファレンス・チーム回診
朝、患者申し送りをを行い、チーム回診を行って指導医からフィードバックを受け、指摘された課題について学習を進めます。
- 2) 病棟回診:受持患者について指導医陣に報告してフィードバックを受けます。受持以外の症例についても見識を深めます。
- 3) 症例検討会:診断・治療困難例、臨床研究症例などについて専攻医が報告し、指導医からのフィードバック、質疑などを行います。
- 4) 診療手技セミナー(不定期):
例:中心静脈挿入法、救急蘇生講習等、診療スキルの実践的なトレーニングを行います。
- 5) CPC:死亡・剖検例、難病・稀少症例についての病理診断を検討します。
- 6) 関連診療科との合同カンファレンス:関連診療科と合同で、患者の治療方針について検討し、内科専門医のプロフェッショナルリズムについても学びます。例:内科、外科、病理による消化器カンファレンス
- 7) Weekly summary discussion:週に1回、指導医と行い、その際、当該週の自己学習結果を指導医が評価し、研修管理委員会で研修状況を報告、検討します。
- 8) 学生・初期研修医に対する指導:病棟や外来で医学生・初期研修医を指導します。後輩を指導することは自分の知識を整理・確認することにつながることから、当プログラムでは、専攻医の重要な取組と位置づけています。

5.学問的姿勢[整備基準:6, 30]

患者から学ぶという姿勢を基本とし、科学的な根拠に基づいた診断、治療を行います。(evidence based medicine の精神)。最新の知識、技能を常にアップデートし、生涯を通して学び続ける習慣を作ります。また、日頃の診療で得た疑問や発想を科学的に追求するため、症例報告あるいは研究発表を奨励します。論文の作成は科学的思考や病態に対する深い洞察力を磨くために極めて重要なことであり、内外へ広く情報発信する姿勢も高く評価されます。

6.医師に必要な、倫理性、社会性[整備基準:7]

医師の日々の活動や役割に関わってくる基本となる能力、資質、態度を患者への診療を通して医療現場から学びます。

甲南医療センターにおいて症例経験や技術習得に関して、単独で履修可能であっても、連携施設において地域住民に密着し、病病連携や病診連携を依頼する立場を経験することにより、地域医療を実施します。そのため複数施設での研修を行うことが望ましく、全てのコースにおいてその経験を積みみます。詳細は項目 8 (P.13、14、15)を参照してください。

地域医療を経験するため、全てのプログラムにおいて連携施設(神戸大学医学部附属病院と神戸市立医療センター中央市民病院、加古川中央市民病院、神鋼記念病院、神戸赤十字病院、千船病院、大阪市立総合医療センター、淀川キリスト教病院、六甲アイランド甲南病院)での研修期間を設けています。専攻医、連携施設では基幹施設で研修不十分となる領域を主として研修します。入院症例だけでなく外来での基本となる能力、知識、スキル、行動の組み合わせを指します。なお、連携病院へのローテーションを行うことで、地域においては、人的資源の集中を避け、派遣先の医療レベル維持に貢献します。

基幹施設、連携施設を問わず、患者への診療を通して、医療現場から学ぶ姿勢の重要性を知ることができます。インフォームド・コンセントを取得する際には上級医に同伴し、接遇態度、患者への説明、予備知識の重要性などについて学習します。医療チームの重要な一員としての責務(患者の診療、カルテ記載、病状説明など)を果たし、リーダーシップをとれる能力を獲得できるようにします。

医療安全と院内感染症対策を十分に理解するため、年に 2 回以上の医療安全講習会、感染対策講習会に出席します。出席回数は常時登録され、年度末近くになると受講履歴が個人にフィードバックされ、受講を促されます。

7.研修施設群による研修プログラムおよび地域医療についての考え方

[整備基準:25、26、28、29]

甲南医療センター(基幹施設)において症例経験や技術習得に関して、単独で履修可能であっても、地域医療を実施するため、複数施設での研修を行うことが望ましく、全てのコースにおいてその経験を求めます。(詳細は項目 10 と 11 を参照のこと)

地域医療を経験するため、全てのプログラムにおいて連携施設(神戸大学医学部附属病院と神戸市立医療センター中央市民病院、加古川中央市民病院、神鋼記念病院、神戸赤十字病院、千船病院、大阪市立総合医療センター、淀川キリスト教病院、六甲アイランド甲南病院)での研修期間を設けています。連携病院へのローテーションを行うことで、人的資源の集中を避け、派遣先の医療レベル維持にも貢献できます。連携施設では基幹施設で研修不十分となる領域を主として研修します。入院症例だけでなく外来での経験を積み、施設内で開催されるセミナーへ参加します。

地域における指導の質および評価の正確さを担保するため、常にメールなどを通じて研修センターと連絡ができる環境を整備し、月に 1 回程度基幹病院の指導医と連絡を取り、プログラムの進捗状況を確認、報告します。

8.年次毎の研修計画[整備基準:16、25、31]

本プログラムでは専攻医が抱く専門医像や将来の希望に合わせて以下の 3 つのコース、①内科基本コース、②各科重点コース、③内科・サブスペシャリティ並行研修を準備しています。コース選択後も条件を満たせば他のコースへの移行も認められます。

Subspecialty が未決定、または高度な総合内科専門医を目指す場合は内科基本コースを選択します。専攻医は各内科学部門ではなく、総合内科に所属し、3 年間で各内科や内科臨床に関連ある救急部門などを 2 ヶ月毎にローテートします。将来の Subspecialty が決定している専攻医は各科重点コースを選択し、各科を原則として 2 ヶ月毎、研修進捗状況によっては 1 ヶ月～3 ヶ月毎にローテーションします。いずれのコースを選択しても遅滞なく内科専門医受験資格を得られる様に工夫されており、専攻医は卒後 5～6 年で内科専門医、その後 Subspecialty 領域の専門医取得ができます。

① 内科基本コース(P.55 参照)

内科(Generality)専門医は勿論のこと、将来、内科指導医や高度な Generalist を目指す方も含まれます。将来の Subspecialty が未定な場合に選択することもあり得ます。内科基本コースは内科の領域を偏りなく学ぶことを目的としたコースであり、専攻医研修期間の 3 年間において内科領域を担当する全ての科をローテーションします。原則として 2 ヶ月を 1 単位として、1 年間に 4 科、3 年間で延べ 8 科を基幹施設でローテーションします。3 年目は地域医療の経験と症例数が充足していない領域を重点的に連携施設で研修します。また、連携施設 1 年間を目安にローテーションします(複数施設での研修の場合は研修期間の合計が 1 年間となります)。研修する連携施設の選定は専攻医と面談の上、プログラム統括責任者が決定します。

② 各科重点コース(P.58 参照)

希望する Subspecialty 領域を重点的に研修するコースです。研修開始直後の 4 か月間は希望する Subspecialty 領域にて初期トレーニングを行います。この期間、専攻医は将来希望する内科において理想的医師像とする指導医や上級医師から、内科医としての基本姿勢のみならず、目指す領域での知識、技術を学習することにより、内科専門医取得への Motivation を強化することができます。その後、2 ヶ月間を基本として他科(場合によっては連携施設での他科研修含む)をローテーションします。研修 3 年目には、連携施設における当該 Subspecialty 科において内科研修を継続して Subspecialty 領域を重点的に研修するとともに、充足していない症例を経験します。研修する連携施設の選定は専攻医と面談の上、希望する Subspecialty 領域の責任者とプログラム統括責任者が協議して決定します。なお、研修中の専攻医数や進捗状況により、初年度から連携施設での重点研修を行うことがあります。あくまでも内科専門医研修が主体であり、重点研修は最長 1 年間とします。別紙2に示すこのコースでは、最初の4ヶ月間を Subspecialty の重点期間に当てていますので、連携施設での Subspecialty 重点期間が残る8ヶ月となります。Subspecialty 重点コースには最長1年間という期間制約があることをご留意ください。また、専門医資格の取得と臨床系大学院への進学を希望する場合は、本コースを選択の上、担当教授と協議して大学院入学時期を決めて頂きます。

9. 専門医研修の評価[整備基準:17～22]

① 形成的評価(指導医の役割)

指導医およびローテーション先の上級医は専攻医の日々のカルテ記載と、症例要約の作成についても指導します。また、技術・技能についての評価も行います。年に1回以上、目標の達成度や各指導医・メディカルスタッフの評価に基づき、研修責任者は専攻医の研修の進行状況の把握と評価を行い、適切な助言を行います。

研修センターは指導医のサポートと評価プロセスの進捗状況についても追跡し、必要に応じて指導医へ連絡を取り、評価の遅延がないようにリマインドを適宜行います。

② 総括的評価

専攻医研修終了年の3月に研修手帳を通して経験症例、技術・技能の目標達成度について最終的な評価を行います。29例の病歴要約の合格、所定の講習受講や研究発表なども判定要因になります。

最終的には指導医による総合的評価に基づいてプログラム管理委員会によってプログラムの修了判定が行われます。

修了後に実施される内科専門医試験(毎年夏～秋頃実施)に合格して、内科専門医の資格を取得します。

③ 研修態度の評価

指導医や上級医のみでなく、メディカルスタッフ(病棟看護師長、臨床検査・放射線技師・臨床工学技士など)から、接点の多い職員5名程度を指名し、研修管理委員会にて2カ月ごとに評価します。半期に1回多職種による評価のシート作成(内科学会の形式による)を行います。

④ 専攻医による自己評価とプログラムの評価

日々の診療・教育的行事において指導医から受けたアドバイス・フィードバックに基づき、Weekly summary discussion を行い、研修上の問題点や悩み、研修の進め方、キャリア形成などについて考える機会を持ちます。

半年に1回に研修指導責任者と現行プログラムに関する面談を行い、専攻医の満足度と改善点に関する意見を収集し、次期プログラムの改訂の参考とします。アンケート用紙は別途定めます。

10. 専門研修プログラム管理委員会[整備基準:35～39]

研修プログラム管理運営体制

本プログラムを履修する内科専攻医の研修について責任を持って管理するプログラム管理委員会を甲南医療センターに設置し、その委員長と各内科から1名ずつ管理委員を選任します。プログラム管理委員会の下部組織として、基幹病院および連携施設に専攻医の研修を管理する研修委員会を置き、委員長が統括します。

11. 専攻医の就業環境(労務管理)[整備基準:40]

専攻医の勤務時間、休暇、当直、給与等の勤務条件に関しては、専攻医の就業環境を整えることを重視します。労働基準法を順守し、甲南医療センターの「※専攻医就業規則及び給与規則」に従います。専攻医の心身の健康維持の配慮については各施設の研修委員会と労働安全衛生委員会で管理します。特に精神衛生上の問題点が疑われる場合は臨床心理士によるカウンセリングを行います。専攻医は採用時に上記の労働環境、労働安全、勤務条件の説明を受けることとなります。プログラム管理委員会では各施設における労働環境、労働安全、勤務に関して報告され、これらの事項について総括的に評価します。

※ 本プログラムでは基幹施設、連携施設の所属の如何に関わらず、基幹施設である甲南病院の統一的な

就業規則と給与規則で統一化していますが、このケースが標準系ということではありません。個々の連携施設において事情は様々ですが、専攻医に配慮のある明確な諸規則を用意いたします。

12. 専門研修プログラムの改善方法 [整備基準:49～51]

2 ヶ月毎に研修プログラム管理委員会を甲南病院にて開催し、プログラムが遅滞なく遂行されているかを全ての専攻医について評価し、問題点を明らかにします。また、各指導医と専攻医の双方からの意見を聴取して適宜プログラムに反映させます。また、研修プロセスの進行具合や各方面からの意見を基に、プログラム管理委員会は毎年、次年度のプログラム全体を見直すこととします。

専門医機構によるサイトビジット(ピアレビュー)に対しては研修管理委員会が真摯に対応し、専門医の育成プロセスの制度設計と専門医の育成が保証されているかのチェックを受け、プログラムの改善に繋がります。

13. 修了判定 [整備基準:21, 53]

日本内科学会専攻医登録評価システムに以下のすべてが登録され、かつ担当指導医が承認していることをプログラム管理委員会が確認して修了判定会議を行います。

- 1) 修了認定には、主担当医として通算で最低 56 疾患群以上の経験と計 160 症例以上の症例(外来症例は登録症例の 1 割まで含むことができる)を経験し、登録しなければなりません。
- 2) 所定の受理された 29 編の病歴要約
- 3) 所定の 2 編の学会発表または論文発表
- 4) JMECC 受講
- 5) プログラムで定める講習会受講
- 6) 指導医とメディカルスタッフによる 360 度評価の結果に基づき、医師としての適性に疑問がないこと。

14. 専攻医が専門研修プログラムの修了に向けて行うべきこと[整備基準:21, 22]

専攻医は様式●●(未定)を専門医認定申請年の 1 月末までにプログラム管理委員会に送付してください。プログラム管理委員会は 3 月末までに修了判定を行い、研修証明書を専攻医に送付します。その後、専攻医は日本専門医機構内科専門医委員会に専門医認定試験受験の申請を行ってください。

15. 研修プログラムの施設群 [整備基準:23～27]

甲南医療センターが基幹施設となり、神戸大学医学部附属病院と神戸市立医療センター中央市民病院、加古川中央市民病院、神鋼記念病院、神戸赤十字病院、千船病院、大阪市立総合医療センター、淀川キリスト教病院、六甲アイランド甲南病院を加えた専門研修施設群を構築することで、より総合的な研修や地域における医療体験が可能となります。

16. 専攻医の受入数

甲南医療センターにおける専攻医の上限(学年分)は 10 名です。

- 1) 甲南医療センターに卒後 3 年目で内科系講座に入局した後期研修医は過去 3 年間併せて 13 名(たすき掛け研修を含む)で、1 学年 4-5 名の実績があります。
- 2) 剖検体数は 2016 年度 21 体、2017 年度 18 体、2018 年度 9 体です。(2016 年度 10 体、2017 年度 10 体、2018 年度 6 体、旧六甲アイランド病院で 2016 年度 11 体、2017 年度 8 体、2018 年度 3 体)
- 3) 経験すべき症例数の充足について

表. 甲南医療センター診療科別診療実績（旧甲南病院単独分）

2018 年実績	入院患者実数 (人/年)
消化器内科	1107
循環器内科	156
糖尿病・代謝・内分泌内科	204
腎臓内科	305
呼吸器内科	533
神経内科	138
血液・膠原病内科	118
感染症	88
アレルギー	24
救急	176

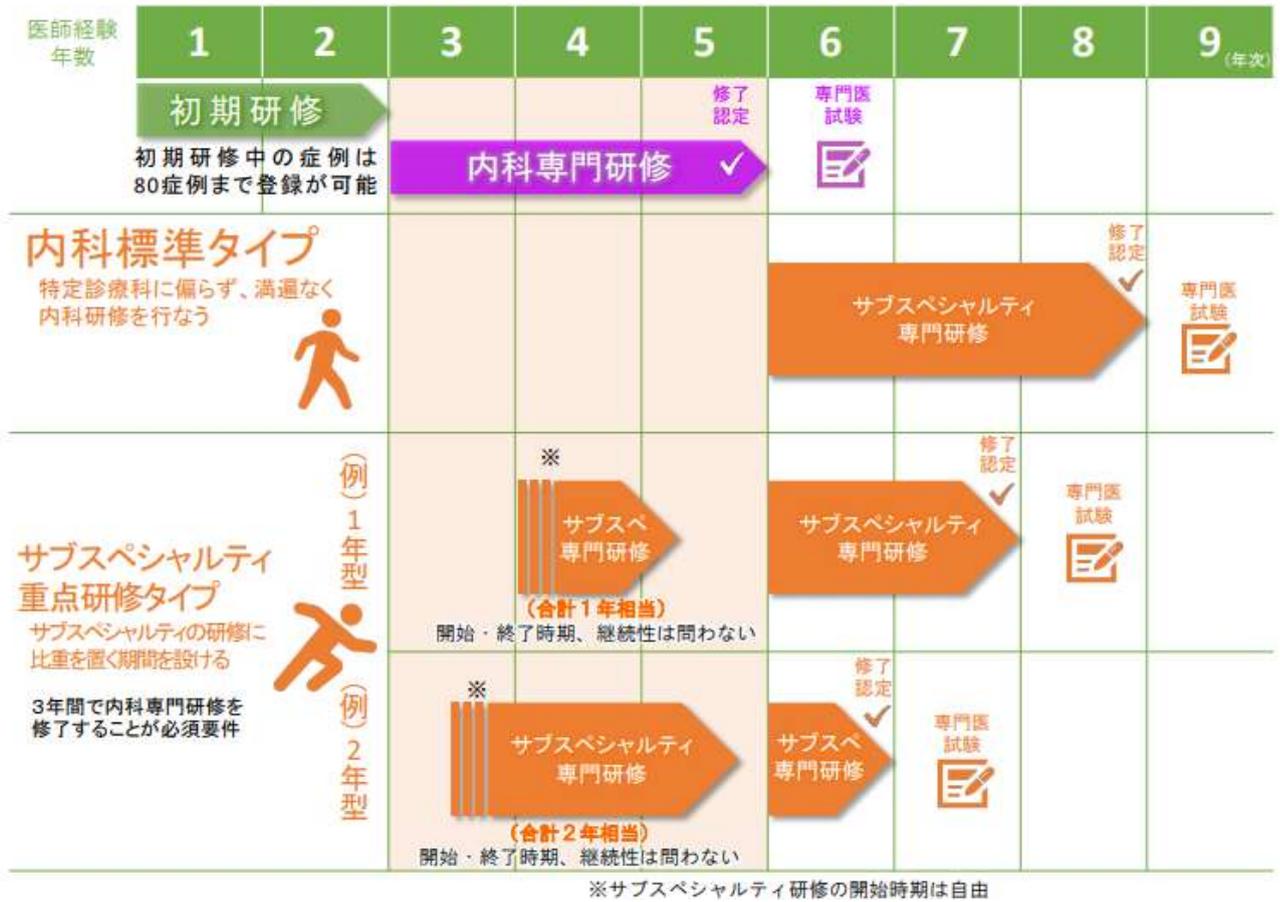
上記表の入院患者について DPC 病名を基本とした各診療科における疾患群別の入院患者数と外来患者疾患を分析したところ、全 70 疾患群のうち、53 において充足可能でした。従って残り 17 疾患群のうち、3 つを連携施設で経験すれば 56 疾患群の修了条件を満たすことができます。

- 4) 専攻医 2 年目～3 年目に研修する連携施設・特別連携施設には、高次機能・専門病院 4 施設、地域連携病院の 5 施設があり、専攻医のさまざま希望・将来像に対応可能です。

17. Subspecialty 領域

内科専攻医になる時点で将来目指す Subspecialty 領域が決定していれば、各科重点コースを選択することになります。基本コースを選択していても、条件を満たせば各科重点コースに移行することも可能です。内科専門医研修修了後、各領域の専門医(例えば循環器専門医)を目指します。

内科専門研修とサブスペ専門研修の連動研修(並行研修)の概念図



内科サブスペシャリティ専門研修も並行して研修可能

図 1. 甲南医療センター内科専門研修プログラム(概念図)

基幹施設である甲南病院内科で、専門研修(専攻医)通算で2-3年間の専門研修を行います。専攻医1年目から3年目の間に専攻医の希望を加味して、連携施設における専門研修の研修施設を調整し決定します。なお、研修達成度によっては Subspecialty 研修も可能です(個々人により異なります)。

18. 研修の休止・中断, プログラム移動, プログラム外研修の条件[整備基準:33]

- 1) 出産、育児によって連続して研修を休止できる期間を 6 カ月とし、研修期間内の調整で不足分を補うこととします。6 か月以上の休止の場合は、未修了とみなし、不足分を予定修了日以降に補うこととします。また、疾病による場合も同じ扱いとします。
- 2) 研修中に居住地の移動、その他の事情により、研修開始施設での研修続行が困難になった場合は、移動先の基幹研修施設において研修を続行できます。その際、移動前と移動先の両プログラム管理委員会が協議して調整されたプログラムを摘要します。この一連の経緯は専門医機構の研修委員会の承認を受ける必要があります。

19. 専門研修指導医[整備基準:36]

指導医は下記の基準を満たした内科専門医です。専攻医を指導し、評価を行います。

【必須要件】

1. 内科専門医を取得していること
2. 専門医取得後に臨床研究論文(症例報告含む)を発表する(「firstauthor」もしくは「corresponding author」であること)。もしくは学位を有していること。
3. 厚生労働省もしくは学会主催の指導医講習会を修了していること。
4. 内科医師として十分な診療経験を有すること。

【(選択とされる要件(下記の 1, 2 いずれかを満たすこと)]

1. CPC、CC、学術集会(医師会含む)などへ主導的立場として関与・参加すること
2. 日本内科学会での教育活動(病歴要約の査読、JMECC のインストラクターなど)

※ 但し、当初は指導医の数も多く見込めないことから、すでに「総合内科専門医」を取得している方々は、そもそも「内科専門医」より高度な資格を取得しているため、申請時に指導実績や診療実績が十分であれば、内科指導医と認めます。また、現行の日本内科学会の定める指導医については、内科系 Subspecialty 専門医資格を 1 回以上の更新歴がある者は、これまでの指導実績から、移行期間(2025 年まで)においてのみ指導医と認めます。

20. 専門研修実績記録システム, マニュアル等[整備基準:41~48]

専門研修は別添の専攻医研修マニュアルにもとづいて行われます。専攻医は別添の専攻医研修実績記録に研修実績を記載し、指導医より評価表による評価およびフィードバックを受けます。総括的評価は臨床検査専門医研修カリキュラムに則り、少なくとも年 1 回行います。

21. 研修に対するサイトビジット(訪問調査)[整備基準:51]

研修プログラムに対して日本専門医機構からのサイトビジットがあります。サイトビジットにおいては研修指導体制や研修内容について調査が行われます。その評価はプログラム管理委員会に伝えられ、必要な場合は研修プログラムの改良を行います。

22. 専攻医の採用と修了[整備基準:52, 53]

1) 採用方法

甲南医療センター内科専門研修プログラム管理委員会は、毎年 4 月から専攻医の応募を受付けます。プログラムへの応募者は、電話かメールで詳細問い合わせの上、9 月 30 日までに甲南医療センター研修管理委員会宛に履歴書を提出してください。原則として 10 月中に書類選考および面接を行い、採否を決定して本人に文書で通知します。応募者および選考結果については 12 月の甲南病院研修管理委員会において報告します。

2) 研修開始届け

研修を開始した専攻医は、各年度の 4 月 1 日までに以下の専攻医氏名報告書を、甲南医療センター内科専門研修プログラム管理委員会および、日本専門医機構内科領域研修委員会に提出します。下記の書類を準備してください。

- 専攻医の氏名と医籍登録番号、内科医学会会員番号、専攻医の卒業年度、専攻医の研修開始年
- 専攻医の履歴書(様式 15-3 号)
- 専攻医の初期研修修了証

3) 研修の修了

全研修プログラム終了後、プログラム統括責任者が召集するプログラム管理委員会にて審査し、研修修了の可否を判定します。

審査は書類の点検と面接試験からなります。

点検の対象となる書類は以下の通りです。

- (1) 専門研修実績記録
- (2) 「経験目標」で定める項目についての記録
- (3) 「臨床現場を離れた学習」で定める講習会出席記録
- (4) 指導医による「形成的評価表」

面接試験は書類点検で問題にあった事項について行われます。

以上の審査により、内科専門医として適格と判定された場合は、研修修了となり、修了証が発行されます。

(専門研修基幹施設)甲南病院医療センター

認定基準 1)専攻医の環境	<ul style="list-style-type: none"> ・初期臨床研修制度基幹型研修指定病院です。 ・研修に必要な図書館とインターネット環境があります。 ・病院研修中は、専攻医として労務環境が保障されます。 ・ハラスメント委員会も整備されています。 ・女性専攻医のための更衣室, 仮眠室, シャワー室, 当直室が整備されています。
認定基準 2)専門研修プログラムの環境	<ul style="list-style-type: none"> ・指導医が 21 名在籍しています。 ・内科専攻医研修委員会を設置し, 施設内で研修する専攻医の研修を管理し, 連携施設に設置されるプログラム管理委員会と連携を図ります。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会を職員必須講習として年2回開催し, 専攻医にも受講を義務付けます。 ・CPC を定期的で開催 (2018 年度 5 回)し, 専攻医に受講を義務付け, そのための時間的余裕を与えます。 ・地域参加型カンファレンスや各診療科の主催するカンファレンスを定期的で開催しており, 専攻医に特定数以上の受講を義務付け, そのための時間的余裕を与えます。
認定基準 3)診療経験の環境	総合内科、消化器、循環器、内分泌、代謝、腎臓、呼吸器、血液、神経、アレルギー、膠原病、感染症、救急の大半の分野(少なくとも7分野以上)で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています。
認定基準 4)学術活動の環境	臨床研究に必要な図書室、学術支援センターなどを設置しています。 倫理委員会を設置しています。 日本内科学会講演会あるいは同地方会に年間で計 3 演題以上の学会発表をしています。関連学会での発表も定期的に行っています。
指導責任者	福永 馨 (糖尿病・総合内科学分野) 【内科専攻医へのメッセージ】 甲南医療センターは、地域の急性期病院として、連携病院と協力し、地域医療の維持・充実に向けて努めています。 患者本位の標準的かつ全人的な医療を心がけ、地域に貢献できる人材を育成することを目指します。
指導医数 (常勤医)	日本内科学会指導医 21 名 日本内科学会総合内科専門医 18 名 日本消化器病学会消化器専門医 10 名 日本消化器内視鏡学会専門医 9 名 日本肝臓学会肝臓専門医 3 名 日本循環器学会循環器専門医 5 名 日本不整脈心電学会認定不整脈専門医 1 名 日本心血管インターベンション治療学会専門医 1 名 日本糖尿病学会専門医 3 名 日本腎臓病学会専門 2 名 日本神経学会神経内科専門医 2 名 日本透析医学会透析専門医 2 名 日本内分泌学会専門医 1 名 日本血液学会血液専門医 1 名 日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医 1 名 日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医 1 名 日本緩和医療学会緩和医療専門医 1 名ほか
外来・入院患者数	外来患者 3,398 名(内科のみの 1 ヶ月平均)入院患者 3,463 名(内科のみの 1 ヶ月平均)

経験できる疾患群	研修手帳(疾患群項目表)にある13領域, 70疾患群の大部分の症例を経験することができます。
経験できる医療・地域医療・診療連携	急性期医療から慢性期にいたる全人的な医療を, そして内科医にとって必須である地域に根ざした医療, 病診・病病連携なども経験できます。
学会認定施設 (内科系)	<p>日本内科学会 認定医制度教育病院 日本循環器学会 認定循環器専門医研修施設 日本心血管インターベンション治療学会 研修関連施設 日本糖尿病学会 認定教育施設 I 日本静脈経腸栄養学会 NST 稼働施設 日本病態栄養学会 栄養管理・NST実施施設 日本内分泌学会認定教育施設 日本緩和医療学会 認定研修施設 日本血液学会 血液研修施設 日本神経学会 准教育施設 日本頭痛学会 准教育施設 日本消化器病学会 認定施設 日本消化器内視鏡学会 指導施設 日本消化管学会 暫定処置による指導施設 日本透析医学会 認定施設 日本腎臓学会 研修施設 日本肝臓学会 認定施設</p>

(専門研修連携施設)(1).神戸大学医学部附属病院

認定基準 1)専攻医の環境	<ul style="list-style-type: none"> ・初期臨床研修制度基幹型研修指定病院です。 ・研修に必要な図書館とインターネット環境があります。 ・医学部附属病院研修中は、医員として労務環境が保障されます。 ・メンタルストレスに適切に対処する部署(健康管理室)があり、ハラスメント委員会も整備されています。 ・女性専攻医のための更衣室、仮眠室、シャワー室、当直室が整備されています。 ・敷地内に院内保育所があり、病院職員としての利用が可能です(但し、数に制限あることと事前に申請が必要です)。
認定基準 2)専門研修プログラムの環境	<ul style="list-style-type: none"> ・指導医が 77 名在籍しています。 ・内科専攻医研修委員会を設置し、施設内で研修する専攻医の研修を管理し、基幹施設に設置されるプログラム管理委員会と連携を図ります。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会を職員必須講習として年2回開催し、専攻医にも受講を義務付けます。 ・CPC を定期的で開催し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・地域参加型カンファレンスや各診療科の主催するカンファレンスを定期的で開催しており、専攻医に特定数以上の受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。
認定基準 3)診療経験の環境	カリキュラムに示す内科領域 13 分野すべての分野で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています。
認定基準 4)学術活動の環境	日本内科学会講演会あるいは同地方会に年間で約 25 演題の学会発表をしています。
指導責任者	坂口一彦 (糖尿病・内分泌・総合内科学分野) 【内科専攻医へのメッセージ】神戸大学医学部附属病院内科系診療科は、連携する関連病院と協力して、内科医の人材育成や地域医療の維持・充実に向けて活動を行っていきます。医療安全を重視し、患者本位の標準的かつ全人的な医療サービスが提供でき、医学の進歩にも貢献できる責任感のある医師を育成することを目指します。
指導医数 (常勤医)	日本内科学会指導医 77 名, 日本内科学会総合内科専門医 65 名 日本消化器病学会消化器専門医 40 名, 日本肝臓学会肝臓専門医 6 名, 日本循環器学会循環器専門医 40 名, 日本内分泌学会専門医 14 名, 日本糖尿病学会専門医 27 名, 日本腎臓病学会専門医 6 名, 日本呼吸器学会呼吸器専門医 14 名, 日本血液学会血液専門医 13 名, 日本神経学会神経内科専門医 16 名, 日本アレルギー学会専門医(内科)2 名, 日本リウマチ学会専門医 17 名, 日本感染症学会専門医 2 名, 日本救急医学会救急科専門医 9 名, ほか
外来・入院患者数	外来患者 12729 名(内科のみの 1 ヶ月平均)入院患者 447 名(内科のみの 1 ヶ月平均)
経験できる疾患群	研修手帳(疾患群項目表)にある 13 領域, 70 疾患群の症例を経験することができますが、大学病院での研修は短期間なので、希望により研修科を選択いただけます。
経験できる技術・技能	技術・技能評価手帳にある内科専門医に必要な技術・技能を、実際の症例に基づきながら幅広く経験することができます。
経験できる医療・地域医療・診療連携	急性期医療はもちろんですが、内科医にとって必須である地域に根ざした医療、病診・病病連携なども経験できます。大学病院ならではの専門・最先端医療も是非経験いただきたいと考えています。
学会認定施設 (内科系)	日本内科学会総合内科専門医認定教育施設 日本臨床検査医学会臨床検査専門医認定病院 日本消化器病学会消化器病専門医認定施設 日本循環器学会循環器専門医研修 日本呼吸器学会呼吸器専門医認定施設 日本血液学会血液専門医研修施設 日本内分泌学会内分泌代謝科専門医認定教育施設 日本糖尿病学会糖尿病専門医認定教育施設

	日本腎臓学会腎臓専門医研修施設 日本肝臓学会肝臓専門医認定施設 日本アレルギー学会アレルギー専門医教育研修施設 日本感染症学会感染症専門医研修施設 日本老年医学会老年病専門医認定施設 日本神経学会神経内科専門医教育施設 日本リウマチ学会リウマチ専門医教育施設 日本集中治療医学会集中治療専門医専門医研修施設
--	--

(専門研修連携施設)(2).神戸市立医療センター中央市民病院

<p>認定基準 【整備基準 24】 1) 専攻医の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初期臨床研修制度基幹型研修指定病院です。 ・研修に必要な図書室とインターネット環境があります。 ・神戸市立医療センター中央市民病院の任期付正規職員として労務環境が保障されています。 ・メンタルストレスに適切に対応出来るよう相談窓口(市役所)を設置しています。 ・ハラスメントの防止及び排除並びにハラスメントに起因する問題が生じた場合、迅速かつ適切な問題解決を図るためハラスメント相談窓口及びハラスメント防止対策委員会を設置しています。 ・女性専攻医が安心して勤務できるように、休憩室、更衣室、仮眠室、シャワー室、当直室が整備されています。 ・敷地内に院内保育所があり、利用可能です。
<p>認定基準 【整備基準 24】 2) 専門研修プログラムの環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・指導医は 39 名在籍しています(下記) ・内科専攻医研修委員会を設置して、施設内で研修する専攻医の研修を管理し、基幹施設に設置されるプログラム管理委員会と連携を図ります。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会を定期的に行開催(医療安全:6 回、感染対策:2 回、医療倫理 2 回)し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・研修施設群合同カンファレンスを定期的に行主催(2017 年度予定)し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・CPC を定期的に行開催(2018 年度実績 6 回)し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・地域参加型のカンファレンス(腹部超音波カンファレンス、びまん性肺疾患勉強会、がんオープンカンファレンス、緩和ケアセミナー など 2018 年度実績 54 回)を定期的に行開催し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。
<p>認定基準 【整備基準 24】 3) 診療経験の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムに示す内科領域 13 分野のうち、総合内科、消化器、循環器、内分泌、代謝、腎臓、呼吸器、血液、神経、アレルギー、膠原病、感染症、救急の全分野(少なくとも 7 分野以上)で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています(上記) ・70 疾患群のうちほぼ全疾患群(少なくとも 35 以上の疾患群)について研修できます(上記) ・専門研修に必要な剖検(2016 年度実績 31 体、2017 年度実績 34 体、2018 年度実績 21 体)を行っています。
<p>認定基準 【整備基準 24】 4) 学術活動の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床研究に必要な図書室、学術支援センターなどを設置しています。 ・倫理委員会を設置し、定期的に行開催(2018 年度実績 1 回)しています。 ・治験管理センターを設置し、定期的に行 IRB、受託研究審査会を開催(2018 年度実績 11 回)しています。 ・日本内科学会講演会あるいは同地方会に年間で計 3 演題以上の学会発表(2018 年度実績 3 演題)をしています。

指導責任者	石川 隆之 【内科専攻医へのメッセージ】 当院の診療体制の大きな特徴は、北米型 ER(救命救急室)、つまり 24 時間・365 日を通して救急患者を受け入れ、ER 専任医によって全ての科の診断および初期治療を行い、必要に応じて各専門科にコンサルトするというシステムにあります。年間の救急外来患者数は 32,000 人以上、救急車搬入患者数も 10,000 人を超え、独立した救急部と各科スタッフ、初期研修医、専攻医が緊密に連携して、軽傷から重症までのあらゆる救急患者に対応しています。この中で専攻医は初期研修から各科の専門的診療に至る過程で重要な役割をはたしており、皆さんがどの診療科を選択しても、大学病院など 3 次救急に特化した施設では得られない、医療の最前線の広範な経験を重ねることができます。
指導医数 (常勤医)	日本内科学会指導医 39 名 日本内科学会総合内科専門医 39 名 日本消化器病学会消化器専門医 9 名 日本循環器学会循環器専門医 11 名 日本内分泌学会専門医 2 名 日本糖尿病学会専門医 4 名 日本腎臓病学会専門医 2 名 日本呼吸器学会呼吸器専門医 7 名 日本血液学会血液専門医 8 名 日本神経学会神経内科専門医 7 名 日本感染症学会専門医 3 名 日本救急医学会救急科専門医 2 名 日本超音波医学会超音波専門医 5 名 日本脈管学会脈管専門医 4 名 日本心血管インターベンション治療学会 CVIT 専門医 1 名 日本不整脈学会不整脈専門医 2 名、日本透析医学会透析専門医 3 名 日本脳卒中学会脳卒中専門医 9 名 日本脳神経血管内治療学会専門医 6 名 日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医 7 名 日本肝臓学会肝臓専門医 5 名 日本医学放射線学会放射線診断専門医 11 名 日本核医学会核医学専門医 3 名 日本消化管学会胃腸科専門医 1 名 日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医 3 名 日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医 3 名 日本老年医学会老年病専門医 1 名 日本病態栄養学会病態栄養専門医 2 名 ほか
外来・入院患者数	外来患者 38,743 名(1 ヶ月平均) 2018 年度 入院患者 19,275 名(1 ヶ月平均)
経験できる疾患群	きわめて稀な疾患を除いて、 研修手帳(疾患群項目表) にある 13 領域、70 疾患群の症例を幅広く経験することができます。
経験できる技術・技能	技術・技能評価手帳 にある内科専門医に必要な技術・技能を、実際の症例に基づきながら幅広く経験することができます。
経験できる地域医療・診療連携	急性期医療だけでなく、超高齢社会に対応した地域に根ざした医療、病診・病病連携なども経験できます。

<p>学会認定施設 (内科系)</p>	<p>日本内科学会認定医制度教育病院 日本老年医学会認定施設 日本循環器学会認定循環器専門医研修施設 日本心血管インターベーション学会認定研修施設 日本神経学会認定医制度教育施設 日本脳卒中学会認定研修教育病院 日本脳神経血管内治療学会指定研修施設 日本呼吸器学会認定施設 日本呼吸器内視鏡学会専門医制度認定施設 日本消化器病学会認定医制度認定施設 日本消化器内視鏡学会認定専門医指導施設 日本糖尿病学会認定教育施設 日本甲状腺学会認定専門医施設 日本内分泌学会内分泌代謝科認定教育施設 日本腎臓学会認定研修施設 日本透析医学会認定医制度認定施設 日本血液学会認定血液研修施設 内分泌・甲状腺外科専門医認定施設 経カテーテルの大動脈弁置換術実施施設 日本超音波医学会認定超音波専門医制度研修施設 日本感染症学会研修施設 日本環境感染学会教育施設 日本静脈経腸栄養学会栄養サポートチーム専門療法士実地修練認定教育施設 日本消化管学会胃腸科指導施設 日本禁煙学会教育施設 日本がん治療認定医機構研修施設 日本臨床腫瘍学会認定研修施設 救急科専門医指定施設 など</p>
-------------------------	---

(専門研修連携施設)(3).加古川中央市民病院

<p>1) 専攻医の環境 【整備基準 24】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初期臨床研修制度基幹型研修指定病院です。 ・研修に必要な図書室とインターネット環境があります。 ・加古川中央市民病院常勤医師として労務環境が保障されています。 ・メンタルストレスに適切に対処する部署(人事部)があります。 ・ハラスメント委員会が人事部に整備されています。 ・女性専攻医が安心して勤務できるように、休憩室、更衣室、仮眠室、シャワー室、当直室が整備されています。 ・敷地内に院内保育所があり、利用可能です。
<p>2) 専門研修プログラムの環境 【整備基準 24】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本内科学会指導医は 40 名在籍しています。 ・研修委員会を設置して、施設内で研修する専攻医の研修を管理し、基幹施設に設置されるプログラム管理委員会と連携を図ります。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会を定期的に行い(各複数回開催)、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・基幹施設が定期的に主催する研修施設群合同カンファレンスに参画し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・CPC を定期的に行い(実績:2015～2018 年度各 11 回)し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・地域参加型のカンファレンスを定期的に行い(東播磨地域ネットワーク研究会→年 3 回、循環器懇話会→年 2 回中 1 回カンファレンス形式開催、在宅連携事例検討会→年 3 回 他)、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。
<p>3) 診療経験の環境 【整備基準 24】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムに示す内科領域 13 分野のうち全分野で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています。 ・70 疾患群のうちほぼ全疾患群について研修できます。
<p>4) 学術活動の環境 【整備基準 24】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床研究に必要な図書室などを整備しています。 ・倫理委員会を設置し、定期的に行っています。 ・臨床研究・治験センターを設置しています。また治験審査委員会を設置し定期的に行っています。 ・日本内科学会講演会あるいは同地方に年間で計3演題以上の学会発表をしています。
<p>指導責任者</p>	<p>西澤 昭彦 【内科専攻医へのメッセージ】 加古川中央市民病院は 600 床を有する神戸以西で最大規模の総合病院で、充実した診療科を揃えて地域の急性期医療を担う中心的存在となっています。各内科領域の専門医が多く在籍しているため内科専門医取得への質の高い研修ができます。救急診療、高度専門診療のみならず、一般的な内科診療も研修することができ、内科医としての総合力が身につきます。また、地域医療を担う一医師として患者さんや周辺医療施設・院内スタッフにも信頼されるよう頑張ります。</p>
<p>指導医数(常勤医)</p>	<p>日本内科学会指導医 40 名、内・日本内科学会総合内科専門医 27 名、日本消化器病学会消化器専門医 16 名、日本循環器学会循環器専門医 13 名、日本糖尿病学会専門医 2 名、日本老年医学会 2 名、日本肝臓学会肝臓専門医 3 名、日本腎臓病学会専門医 3 名、日本呼吸器学会呼吸器専門医 4 名、日本血液学会血液専門医 3 名、日本神経学会神経内科専門医 2 名、日本アレルギー学会専門医(内科)1 名、日本リウマチ学会専門医(内科)4 名、日本感染症学会専門医 1 名、日本救急医学会救急科専門医(救急科)2 名、ほか</p>
<p>外来・入院患者数</p>	<p>外来患者 29,135 名(病院全体 1 ヶ月平均) 入院患者 16,542 名(病院全体 1 ヶ月平均)</p>
<p>経験できる疾患群</p>	<p>きわめて稀な疾患を除いて、研修手帳(疾患群項目表)にある 13 領域、70 疾患群の症例を幅広く経験することができます。</p>

経験できる技術・技能	技術・技能評価手帳にある内科専門医に必要な技術・技能を、実際の症例に基づきながら幅広く経験することができます。
経験できる地域医療・診療連携	急性期医療だけでなく、超高齢社会に対応した地域に根ざした医療、病診・病病連携なども経験できます。
学会認定施設(内科系)	日本内科学会認定医制度教育病院、日本アレルギー学会教育施設、日本老年医学会専門医制度認定施設、日本病院総合診療医学会認定施設、日本消化器病学会専門医制度認定施設、日本消化器内視鏡学会専門医制度指導施設、日本動脈硬化学会専門医制度教育施設、日本高血圧学会認定研修施設、日本呼吸器学会認定施設、日本呼吸器内視鏡学会関連認定施設、日本糖尿病学会専門医制度認定教育施設、日本臨床腫瘍学会認定研修施設、日本血液学会血液研修施設、日本リウマチ学会認定研修施設、日本腎臓学会研修施設、日本神経学会准教育施設、日本循環器学会認定循環器専門医研修施設、日本高血圧学会専門医認定施設、日本不整脈心電学会認定不整脈専門医研修施設、日本心血管インターベンション治療学会認定研修施設 など

(専門研修連携施設)(4). 神鋼記念病院

<p>1) 専攻医の環境 【整備基準 24】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初期臨床研修制度の基幹型研修指定病院です。 ・研修に必要な図書室とインターネット環境があります。 ・神鋼記念病院常勤医師として労務環境が保障されています。 ・メンタルストレスに適切に対処する部署(人事所管室職員担当)があります。 ・ハラスメント相談員が人事所管室に専従しています。 ・女性専攻医が安心して勤務できるように、休憩室、更衣室、仮眠室、シャワー室、当直室が整備されています。 ・近隣に契約保育所があり、利用可能です。
<p>2) 専門研修プログラムの環境 【整備基準 24】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本内科学会指導医は 28 名在籍しています。 ・内科専攻医研修委員会を設置して、施設内で研修する専攻医の研修を管理し、基幹施設に設置されるプログラム管理委員会と連携を図ります。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会を定期的に開催し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・研修施設群合同カンファレンスを定期的に主催し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・CPC を定期的に開催(年 3 回程)し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・地域参加型のカンファレンス(神鋼記念病院地域連携講演会、東神戸総合内科講演会、東神戸臨床フォーラム、東神戸呼吸器疾患講演会、神鋼循環器セミナー、神鋼糖尿病セミナー、神戸膠原病腎臓カンファレンス、などを定期的に開催し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。
<p>3) 診療経験の環境 【整備基準 24】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムに示す内科領域 13 分野のうち、総合内科、消化器、呼吸器、循環器、血液、膠原病、神経、代謝、救急の分野で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています。
<p>4) 学術活動の環境 【整備基準 24】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・総合医学研究センターを設立し、医学・医療の発展のために臨床医学研究を推進し、高度先進医療の支援や共同研究を行なっています。 ・倫理委員会を設置し、定期的に開催(2017 年度実績 10 回)しています。 ・治験委員会を設置し、定期的に受託研究審査会を開催(2017 年度実績 6 回)しています。 ・日本内科学会講演会あるいは同地方会に年間で計 3 演題以上の学会発表(2017 年度実績 5 演題)をしています。
<p>指導責任者</p>	<p>岩橋 正典 【内科専攻医へのメッセージ】 神鋼記念病院は、神戸の中心地に位置する急性期総合病院であるとともに、地域に根ざした第一線の病院でもあります。このことから臓器別の Subspecialty 領域(総合内科、消化器内科、呼吸器内科、循環器内科、血液内科、リウマチ膠原病内科、神経内科、糖尿病代謝内科、腫瘍内科、救急)に支えられた高度な急性期医療とコモンディゼースが同時に経験できます。</p>
<p>指導医数(常勤医)</p>	<p>日本内科学会指導医 28 名、日本内科学会総合内科専門医 18 名 日本消化器病学会消化器専門医 7 名、日本循環器学会循環器専門医 5 名、 日本糖尿病学会専門医 3 名、日本呼吸器学会呼吸器専門医 3 名、 日本血液学会血液専門医 4 名、日本神経学会神経内科専門医 2 名、 日本アレルギー学会専門医 2 名、日本リウマチ学会専門医 5 名、 日本肝臓学会専門医 1 名、ほか</p>
<p>外来・入院患者数</p>	<p>外来患者 20,922 名(1 ヶ月平均) 入院患者 9,480 名(1 ヶ月平均)</p>
<p>経験できる疾患群</p>	<p>きわめて稀な疾患を除いて、研修手帳(疾患群項目表)にある 13 領域、70 疾患群の症例を幅広く経験することができます。</p>

経験できる技術・技能	技術・技能評価手帳にある内科専門医に必要な技術・技能を、実際の症例に基づきながら幅広く経験することができます。
経験できる地域医療・診療連携	急性期医療だけでなく、超高齢社会に対応した地域に根ざした医療、病診・病病連携なども経験できます。
学会認定施設(内科系)	日本内科学会認定医制度教育病院、臨床研修研究会臨床研修指定病院、日本循環器学会認定循環器専門医研修施設、日本呼吸器学会認定施設、日本呼吸器内視鏡学会認定施設、日本消化器病学会専門医制度認定施設、日本消化器内視鏡学会指導施設、日本糖尿病学会認定教育施設、日本リウマチ学会教育施設、日本血液学会血液研修施設、日本臨床腫瘍学会認定研修施設、日本がん治療認定医機構認定研修施設、日本乳癌学会関連施設、アレルギー学会認定施設、日本脳卒中学会認定施設、日本神経学会准教育施設、日本医学放射線学会放射線科専門医修練機関など

(専門研修連携施設)(5)神戸赤十字病院

<p>認定基準 1)専攻医の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初期臨床研修制度教育病院です。 ・研修に必要な図書室とインターネット環境があります。 ・神戸赤十字病院常勤嘱託医師として労務環境が保障されています。 ・メンタルストレスに適切に対処する部署(心療内科)があります。 ・ハラスメント委員会が院内に整備されています。 ・女性医師が安心して勤務できるように、休憩室、更衣室、仮眠室、シャワー室、当直室が整備されています。
<p>認定基準 2)専門研修プログラムの環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・指導医は 11 名在籍しています(下記)。 ・内科専門研修プログラム管理委員会(統括責任者藤井副院長、プログラム管理者梶本部長、プログラム管理委員会委員長土井部長)にて、基幹施設、連携施設に設置されている研修委員会との連携を図ります。 ・基幹施設内において研修する専攻医の研修を管理する臨床研修センターを設置します。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会を定期的に行い、専攻医に受講を義務づけ、そのための時間的余裕を与えます。 ・研修施設群合同カンファレンスを定期的に行い、専攻医に受講を義務づけ、そのための時間的余裕を与えます。 ・CPC を定期的に行い、専攻医に受講を義務づけ、そのための時間的余裕を与えます。 ・地域参加型のカンファレンス(HAT 呼吸器疾患検討会等)を定期的に行い、専攻医に受講を義務づけ、そのための時間的余裕を与えます。 ・プログラムに所属する全専攻医に JMECC 受講を義務づけ、そのための時間的余裕を与えます。
<p>認定基準 3)診療経験の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムに示す内科領域13分野のうち全分野(少なくとも7 分野以上)で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています。 ・70 疾患群のうちほぼ全疾患群(すくなくとも 35 以上の疾患群)について研修できます。 ・専門研修に必要な剖検を行っています。
<p>認定基準 4)学術活動の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床研修に必要な図書室を整備しています。 ・倫理委員会を設置し、定期的に行っています。 ・治験管理委員会を設置し、随時受託研究審査会を開催しています。 ・日本内科学会講演会あるいは同地方会に年間で計3演題以上の学会発表(2017 年実績 15 演題)をしています。
<p>指導責任者</p>	<p>責任者名(所属) 藤井正俊副院長 兼 消化器内科部長</p> <p>【内科専攻医へのメッセージ】 神戸赤十字病院は兵庫県神戸市医療圏の中心的な急性期病院であり、西播医療圏・近隣医療圏にある連携施設とで内科専門研修を行い、必要に応じた可塑性のある、地域医療にも貢献できる内科専門医を目指します。 主担当医として、入院から退院まで啓示的に、診断・治療の流れを通じて、社会的背景・療養環境調整も包括する全人的医療を実践できる 内科専門医を目指します。</p>
<p>指導医数 (常勤医)</p>	<p>内科学会指導医14名 内科学会総合内科専門医9名 日本消化器病学会消化器専門医7名 日本循環器学会循環器専門医7名 日本呼吸器学会呼吸器専門医3名 日本神経学会神経内科専門医 1 名 日本糖尿病学会専門医1名 日本アレルギー学会専門医(内科)1名</p>

	日本救急医学会救急科専門医2名
外来・入院患者数	外来患者 4802.8名(内科のみの1ヶ月平均) 入院患者 377.4名(内科のみの1ヶ月平均)
経験できる疾患群	きわめて稀な疾患を除いて、研修手帳(疾患群項目表)にある13領域、70疾患群の症例を幅広く経験することができます。
経験できる技術・技能	技術・技能評価手帳にある内科専門医に必要な技術・技能を、実際の症例に基づきながら幅広く経験することができます。
経験できる医療・地域医療・診療連携	急性期疾患だけでなく、超高齢化社会に対応した地域に根ざした医療、病診・病病連携なども経験できます。
学会認定施設 (内科系)	日本内科学会認定医制度教育病院 日本消化器病学会認定施設 日本循環器学会循環器専門医研修施設 日本呼吸器学会認定施設 日本アレルギー学会教育施設 日本糖尿病学会認定教育施設 日本消化器内視鏡学会指導施設 日本呼吸器内視鏡学会専門医制度認定施設 日本神経学会認定准教育施設 日本がん治療認定医機構認定研修施設 日本高血圧学会専門医認定施設 日本救急医学会救急科専門医指定施設 日本心療内科学会専門医研修施設 日本心身医学会認定医制度研修診療施設 日本脳卒中学会専門医認定制度研修教育病院 日本リウマチ学会教育施設 日本心血管インターベンション治療学会研修施設など

(専門研修連携施設)(6). 千船病院

<p>認定基準 【整備基準 23】 1)専攻医の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初期臨床研修制度基幹型研修指定病院です。 ・研修に必要な図書室とインターネット環境があります。 ・千船病院常勤医師として、法人の規定に則り労務環境が保障されています。 ・メンタルストレスおよびハラスメントに適切に対処する部署(労働安全衛生委員会)があります。 ・女性専攻医も安心して勤務できるように、休憩室、更衣室、仮眠室、シャワー室、当直室が整備されています。 ・隣接地(徒歩約 2 分)に院内保育所があり、事前手続きにより利用可能です。
<p>認定基準 【整備基準 23】 2)専門研修プログラムの環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・指導医は 16 名在籍しています。 ・基幹施設内において研修する専攻医の研修を管理する内科専門研修委員会と臨床研修センターを設置しています。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会を定期的開催(2018 年度実績 医療倫理 1 回, 医療安全 2 回, 感染対策 2 回)し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・研修施設群合同カンファレンスを定期的に参加し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・CPC を定期的開催(2018 年度実績 10 回, 2017 年度実績 10 回)し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・地域参加型のカンファレンス(2018 年度実績 7 回)を定期的開催し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・プログラムに所属する全専攻医に JMECC 受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・特別連携施設(日高医療センター)の専門研修では、電話やメール、週 1 回程度の千船病院での面談・カンファレンスなどにより指導医がその施設での研修指導を行います。 ・日本専門医機構による施設実地調査に、臨床研修センターとプログラム管理委員会とで対応します。
<p>認定基準 【整備基準 23/31】 3)診療経験の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムに示す内科領域 13 分野のうち、総合内科、消化器、循環器、代謝、腎臓、呼吸器、感染症および救急で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています。 ・70 疾患群のうちほとんどの疾患群(少なくとも定常的に 33 以上の疾患群)について研修できます。 ・専門研修に必要な剖検(2006 年度から 2018 年度実績、毎年 10 体以上)を行っています。
<p>認定基準 【整備基準 23】 4)学術活動の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床研究に必要な図書室などを整備しています。 ・倫理委員会および治験管理委員会を開催(2018 年度実績、倫理委員会 7 回、治験委員会 12 回)しています。 ・日本内科学会講演会あるいは同地方会に年間で計 3 演題以上の学会発表(2006 年度から 2018 年度実績、毎年 3 演題以上)をしています。
<p>指導責任者</p>	<p>尾崎 正憲(内科教育責任者) 【内科専攻医へのメッセージ】 当院のプログラムでは、急性期から回復期、さらに退院後の慢性期医療にいたるまで幅広い領域で内科的診療にあたり、知識や技能だけでなく、現在の医学・医療の問題点なども探求することを目標にしています。あらゆるステージの医療に携わることで、患者さんの社会的背景や地域包括ケアシステムの現状を身をもって経験することができ、本当の全人的医療を実践できる内科専門医の育成を目指します。</p>
<p>指導医数 (常勤医)</p>	<p>日本内科学会指導医 15 名 日本内科学会総合内科専門医 16 名 日本消化器病学会消化器病専門医 4 名 日本消化器内視鏡学会専門医 2 名 日本肝臓学会肝臓専門医 1 名 日本循環器学会循環器専門医 6 名</p>

	<p>日本不整脈学会・日本心電学会認定不整脈専門医 2 名 日本内分泌学会内分泌代謝科専門医 1 名 日本糖尿病学会専門医 2 名 日本病態栄養学会認定病態栄養専門医 1 名 日本腎臓病学会専門医 4 名 日本透析医学会専門医 3 名 日本動脈硬化学会認定動脈硬化専門医 1 名 日本病院総合診療学会認定医 5 名</p>
外来・入院患者数	外来患者 6,166 名(1ヶ月平均) 入院患者 3,073 名(1ヶ月平均)
経験できる疾患群	きわめて稀な疾患を除いて、研修手帳(疾患群項目表)にある 13 領域, 70 疾患群の症例の多くを幅広く経験することができます。
経験できる技術・技能	技術・技能評価手帳にある内科専門医に必要な技術・技能を、実際の症例に基づきながら幅広く経験することができます。
経験できる地域医療・診療連携	急性期医療だけでなく、超高齢社会に対応した地域に根ざした医療, 病診・病病連携なども経験できます。
学会認定施設 (内科系)	<p>日本内科学会認定医制度教育病院 日本消化器病学会認定関連施設 日本消化器内視鏡学会専門医制度指導施設 日本循環器学会認定循環器専門医研修施設 日本内分泌学会内分泌代謝科認定教育施設 日本腎臓学会研修施設 日本透析医学会専門医制度認定施設 日本糖尿病学会認定教育施設 日本病態栄養学会病態栄養専門医研修認定施設 日本がん治療認定医機構認定研修施設 日本アレルギー学会専門医準教育研修施設 日本病院総合診療医学会認定施設</p>

(専門研修連携施設)(7). 大阪市立総合医療センター

<p>認定基準 【整備基準 23】 1)専攻医の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床研修指定病院（協力型臨床研修病院）です。 ・研修に必要な図書室とインターネット環境があります。 ・大阪市民病院機構職員（有期雇用職員）として労務環境が保障されています。 ・大阪市民病院機構としてメンタルヘルスに適切に対処する部署があります。 ・ハラスメントに関する相談窓口があります。 ・女性専攻医が安心して勤務できるように、休憩室・更衣室・シャワー室・当直室が整備されています。 ・大阪市立総合医療センター敷地内にある院内保育所が利用可能です。
<p>認定基準 【整備基準 23】 2)専門研修プログラムの環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・指導医は 41 名在籍しています。 ・ともに総合内科専門医かつ指導医である、内科プログラム管理委員会（統括責任者：副院長）、プログラム管理者（診療部長）が各研修施設に設置されている研修委員会との連携を図ります。 ・基幹施設内において研修する専攻医の研修を管理する内科専門研修管理委員会と事務局を設置します。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会 を定期的に行い専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・研修施設群合同カンファレンスを定期的に行い専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・CPC（2018 年度実績 8 回）を定期的に行い専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・地域参加型のカンファレンスである都島メディカルカンファレンス（年 2 回）、キャンサーボード（年 10 回）、学術講演会（年 1 回）、DMnet one 研究会（年 6 回）等を定期的に行い専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・プログラムに所属する全専攻医に JMECC（2019 年度開催実績 1 回：受講者 6 名、2018 年度開催実績 1 回：受講者 5 名、2017 年度開催実績 2 回：受講者 10 名）の受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・内科専門研修管理委員会と事務局は日本専門医機構による施設実地調査に対応します。 ・特別連携施設（大阪市立弘済院附属病院）の専門研修では、電話・大阪市立総合医療センターでの面談（週 1 回）・カンファレンス等により指導医がその施設での研修指導を行います。
<p>認定基準 【整備基準 23/31】 3)診療経験の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムに示す内科領域 13 分野のうち全分野（少なくとも 7 分野以上）で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています（上記）。 ・70 疾患群のうち、ほぼ全疾患群（少なくとも 35 以上の疾患群）について研修できます（上記）。 ・専門研修に必要な剖検（2016 年度実績 12 体、2017 年度実績 14 体、2018 年度実績 10 体）を行っています。
<p>認定基準 【整備基準 23】 4)学術活動の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床研究に必要な図書室等を整備しています。 ・倫理委員会を設置し、定期的に行い（2018 年度実績 12 回）しています。 ・治験管理室を設置し、定期的に行い受託研究審査会を開催（2018 年度実績 11 回）しています。 ・日本内科学会講演会あるいは同地方会に年間で多数の学会発表（2017 年度実績 49 演題）をしています。
<p>指導責任者</p>	<p>山根 孝久 【内科専攻医へのメッセージ】 大阪市立総合医療センターは、大阪市の中心的な急性期病院であり大阪市医療圏・豊能医療圏にある連携施設・特別連携施設と連携し内科専門研修を行い、必要に応じた可塑性のある、地域医療にも貢献できる内科専門医を目指します。 主担当医として、入院から退院（初診・入院～退院・通院）まで経時的に、診断・治療の流れを通じて、社会的背景や療養環境調整をも包括する全人的医療を実践できる内科専門医に</p>

	なることを目指します。
指導医数 (常勤医)	日本内科学会指導医 40 名、日本内科学会総合内科専門医 42 名 日本消化器病学会専門医 12 名、日本肝臓学会専門医 4 名、 日本循環器学会専門医 6 名、日本内分泌学会専門医 (内科) 7 名、 日本腎臓病学会専門医 5 名、日本糖尿病学会専門医 6 名、 日本呼吸器学会専門医 6 名、日本血液学会専門医 5 名、 日本神経学会専門医 3 名、日本アレルギー学会専門医 (内科) 4 名、 日本リウマチ学会専門医 1 名、日本感染症学会専門医 1 名ほか
外来・入院患者数	外来患者 13,437 名(1ヶ月平均) 入院患者 8,779 名(1ヶ月平均)
経験できる疾患群	研修手帳 (疾患群項目表) にある 13 領域、70 疾患群の症例を幅広く経験することができます。
経験できる技術・技能	技術・技能評価手帳にある内科専門医に必要な技術・技能を、実際の症例に基づきながら幅広く経験することができます。
経験できる地域医療・診療連携	急性期医療だけでなく、超高齢社会に対応した地域に根ざした医療、病診・病病連携等も経験できます。
学会認定施設 (内科系)	日本内科学会認定医制度教育病院 日本糖尿病学会認定教育施設 日本内分泌学会内分泌代謝科認定教育施設 日本消化器病学会専門医制度認定施設 日本循環器学会認定循環器専門医研修施設 日本呼吸器学会認定施設 日本血液学会認定血液研修施設 日本腎臓学会認定研修施設 日本リウマチ学会教育施設 日本透析医学会認定施設 日本神経学会専門医制度認定教育施設 日本アレルギー学会専門医教育施設 日本救急医学会救急科専門医指定施設等 日本呼吸器内視鏡学会認定施設 日本心血管インターベンション治療学会認定研修施設 日本臨床腫瘍学会認定研修施設 日本消化器内視鏡学会専門医制度指導施設 日本てんかん学会てんかん専門医制度認定研修施設 日本集中治療医学会専門医研修施設 日本高血圧学会高血圧認定研修施設 日本甲状腺学会認定専門医認定施設 日本がん治療認定医機構認定研修施設 日本緩和医療学会認定研修施設 日本肝臓学会認定医制度認定施設 日本静脈経腸栄養学会 NST 稼働施設栄養サポートチーム専門療法士修練施設 日本感染症学会認定研修施設等

(専門研修連携施設)(8). 淀川キリスト教病院

<p>認定基準 【整備基準 23】 1)専攻医の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初期臨床研修制度基幹型研修指定病院です。 ・研修に必要な図書室とインターネット環境があります。貸与されたタブレット端末を用いて電子ジャーナル検索がいつでもできます。 ・淀川キリスト教病院常勤医師として労務環境が保障されています。 ・メンタルストレスに適切に対処する部署(メンタルヘルス推進課)があります。 ・ハラスメント相談窓口およびハラスメント防止・対応マニュアルが淀川キリスト教病院グループ内に整備されています。 ・女性専攻医が安心して勤務できるように、休憩室、更衣室、仮眠室、シャワー室、当直室が整備されています。 ・敷地外に院内保育所があり、利用可能です。また院内で病児保育の利用も可能です。
<p>認定基準 【整備基準 23】 2)専門研修プログラムの環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・指導医は 35 名在籍しています(下記)。 ・内科専門研修プログラム管理委員会(統括責任者:総合内科専門医かつ指導医)にて、基幹施設、連携施設に設置されている研修委員会との連携を図ります。 ・基幹施設内において研修する専攻医の研修を管理する内科専門研修委員会と臨床研修センターが設置されています。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会を定期的開催(2018 年度実績 5 回)し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・CPC を定期的開催(2018 年度実績 7 回)し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・地域参加型のカンファレンス(地域医療支援病院勉強会 18 回、医師会病院研修会 4 回、各内科主催のもの合計 24 回:2018 年度実績)を定期的開催し、専攻医に受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。 ・プログラム所属の全専攻医に JMECC 受講(2018 年度開催実績 2 回:受講者 18 名)を義務付けそのための時間的余裕を与えます。 ・日本専門医機構による施設実地調査に臨床研修センターが対応します。
<p>認定基準 【整備基準 23/31】 3)診療経験の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムに示す内科領域 13 分野のうち全分野で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています(上記)。 ・70 疾患群のうちほぼ全疾患群について研修できます(上記)。 ・専門研修に必要な剖検(2018 年度実績 14 体)を行っています。
<p>認定基準 【整備基準 23】 4)学術活動の環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床研究に必要な図書室、資料作成室などを整備しています。 ・倫理委員会を設置し、定期的開催(2018 年度実績 9 回)しています。 ・治験審査委員会を設置し、定期的開催(2018 年度実績 6 回)しています。 ・日本内科学会講演会あるいは同地方会に年間で計 3 演題以上の学会発表(2018 年度実績 10 演題)をしています。
<p>指導責任者</p>	<p>紙森 隆雄</p> <p>【内科専攻医へのメッセージ】</p> <p>淀川キリスト教病院は、全人医療を理念とし、幅広い診療科と高度な医療機器を備え、大阪市北部・北摂地域の医療の中心的役割を担っている 581 床の急性期総合病院です。現在大阪府がん診療拠点病院および地域医療支援病院、DPC 特定病院群に指定され、年間 7000 件前後の救急搬送実績があります。内科は 10 科からなり、将来希望するサブスペシャリティ領域に充実した指導医やスタッフが在籍しています。サブスペシャリティ領域を含めた質の高い内科専門医を目指す研修医の皆様の参加をぜひお待ちしております。</p>
<p>指導医数 (常勤医)</p>	<p>日本内科学会指導医 34 名、日本内科学会総合内科専門医 32 名、 日本消化器病学会消化器専門医 10 名、日本肝臓学会肝臓専門医 2 名、 日本循環器学会循環器専門医 7 名、日本内分泌学会専門医 2 名、 日本糖尿病学会専門医 3 名、日本腎臓病学会専門医 2 名、 日本呼吸器学会呼吸器専門医 6 名、日本血液学会認定血液専門医 2 名、 日本神経学会神経内科専門医 3 名、日本アレルギー学会専門医(内科)4 名、 日本リウマチ学会専門医 2 名、がん薬物療法専門医 2 名、 日本消化器内視鏡学会専門医 9 名 ほか</p>

外来・入院患者数	外来患者 10555 名(2018 年度平均延数/月) 新入院患者 570 名(2018 年度平均数/月)
経験できる疾患群	きわめて稀な疾患を除いて、研修手帳(疾患群項目表)にある 13 領域、70 疾患群の症例を幅広く経験することができます。
経験できる技術・技能	技術・技能評価手帳にある内科専門医に必要な技術・技能を、実際の症例に基づきながら幅広く経験することができます。
経験できる地域医療・診療連携	急性期医療だけでなく、超高齢社会に対応した地域に根ざした医療、病診・病病連携なども経験できます。
学会認定施設 (内科系)	<p>日本内科学会認定医制度教育病院</p> <p>日本血液学会血液研修施設</p> <p>日本循環器学会認定循環器専門医研修施設</p> <p>日本高血圧学会専門医認定施設</p> <p>日本呼吸器学会認定施設</p> <p>日本消化器病学会認定施設</p> <p>日本消化器内視鏡学会認定指導施設</p> <p>日本腎臓学会研修施設</p> <p>日本透析医学会教育関連施設</p> <p>日本神経学会認定教育施設</p> <p>日本脳卒中学会専門医研修教育施設</p> <p>日本リウマチ学会教育施設</p> <p>日本臨床腫瘍学会認定研修施設</p> <p>日本救急医学会救急科専門医指定施設</p> <p>日本がん治療認定医機構認定研修施設</p> <p>日本糖尿病学会認定教育施設</p> <p>日本内分泌学会認定教育施設</p> <p>日本アレルギー学会認定教育施設</p> <p>日本緩和医療学会認定教育施設など</p>

(専門研修連携施設)(9). 六甲アイランド甲南病院

認定基準 【整備基準 23】 1)専攻医の環境	<ul style="list-style-type: none"> ・研修に必要な図書室とインターネット環境があります。 ・甲南医療センター常勤医として労務環境が保障されます。 ・メンタルストレスに適切に対処する部署(人事部長、産業医)があります。 ・ハラスメント委員会が整備されています。 ・女性専攻医のための更衣室、仮眠室、シャワー室、当直室が整備されています。
認定基準 【整備基準 23】 2)専門研修プログラムの環境	<ul style="list-style-type: none"> ・指導医が6名在籍しています。 ・内科専攻医委員会を設置し、施設内で研修する専攻医の研修を管理し、甲南医療センターに設置されているプログラム管理委員会と連携を図ります。 ・医療倫理・医療安全・感染対策講習会を職員必須講習として定期的に行います(2018年度実績:医療倫理2回、医療安全12回、感染対策委員会12回)専攻医にも受講を義務付けます。 ・甲南医療センターで開催するCPCに参加し、専攻医に受講を義務付け、そのため時間的余裕を与えます。 <p>地域参加型カンファレンスや各診療科の主催するカンファレンスを定期的に行っており、専攻医に特定以上の受講を義務付け、そのための時間的余裕を与えます。</p>
認定基準 【整備基準 23/31】 3)診療経験の環境	カリキュラムに示す内科領域13分野のうち総合内科、消化器、循環器、内分泌、代謝、腎臓、呼吸器、神経、アレルギー、膠原病、感染症で定常的に専門研修が可能な症例数を診療しています。 <ul style="list-style-type: none"> ・70疾患群のうちほぼ全疾患群について研修できます(上記)。 ・専門研修に必要な剖検(2018年度実績14体)を行っています。
認定基準 【整備基準 23】 4)学術活動の環境	<ul style="list-style-type: none"> ・日本内科学会講演会あるいは同地方会に年間で1演題以上の学会発表をしています。関連学会での発表も行っています。
指導責任者	坂井 誠 【内科専攻医へのメッセージ】 当院では地域包括医療につき多くの症例を経験することで、治療のみならず、保健サービス、在宅ケア、栄養管理、精神管理、リハビリテーション、福祉・介護サービス等を包括するチームワークで連携対応し、福祉社会に貢献できる医師を育成する研修を行っております。
指導医数 (常勤医)	日本内科学会指導医6名、日本内科学会総合内科専門医5名、日本糖尿病学会専門医1名、日本透析医学会専門医2名、日本消化器病学会専門医2名、日本消化器内視鏡学会専門医2名、日本循環器学会専門医1名、日本腎臓学会専門医1名、日本神経学会神経内科専門医1名ほか
外来・入院患者数	外来患者2,123名(2018年度内科のみの1ヶ月平均) 入院患者数2,235名(2018年度内科のみの1ヶ月平均)
経験できる疾患群	きわめて稀な疾患を除いて、研修手帳(疾患群項目表)にある13領域、70疾患群の症例を幅広く経験することができます。
経験できる技術・技能	技術・技能評価手帳にある内科専門医に必要な技術・技能を、実際の症例に基づきながら幅広く経験することができます。
研修できる地域医療・診療連携	急性期疾患から慢性疾患にいたるまで、甲南医療センターとの密な連携により、内科医にとって必要である地域に根ざした医療、病診、病病連携が経験できます。
学会認定施設 (内科系)	日本内科学会認定制度教育関連施設、日本消化器内視鏡学会指導施設、日本循環器学会認定循環器専門医研修施設、日本病態栄養学会栄養管理・NST実施施設、日本糖尿病学会教育関連施設、日本高血圧学会専門医認定施設、日本透析医学会教育関連施設、日本消化器病学会認定専門医制度認定施設、日本神経学会准教育施設

甲南医療センター内科専門研修プログラム管理委員会

甲南医療センター

福永 馨	プログラム統括責任者(糖尿病、内分泌・代謝、総合内科分野責任者)
山田 浩幸	委員長 (糖尿病、内分泌・代謝、総合内科分野責任者)
大久保 英明	副委員長 (救急分野責任者)
藤森 明	腎臓内科分野責任者
清水 宏紀	循環器内科分野責任者
下山 学	腫瘍・血液内科分野責任者
西岡 千晴	消化器内科分野責任者
北村 重和	神経内科分野責任者
中田 恭介	呼吸器内科分野責任者
苅田 豊	事務部長
速水 光	人事部長
後藤 謙	事務部副部長
高橋 暢	病院秘書課・研修管理担当

連携施設担当委員

坂口 一彦	神戸大学医学部附属病院
古川 裕	神戸市立医療センター中央市民病院
西澤 昭彦	加古川中央市民病院
岩橋 正典	神鋼記念病院
土井 智文	神戸赤十字病院
尾崎 正憲	千船病院
重岡 靖	大阪市立総合医療センター
紙森 隆雄	淀川キリスト教病院
坂井 誠	六甲アイランド甲南病院

オブザーバー1 内科専攻医

オブザーバー2 内科専攻医

甲南医療センター内科専攻医研修マニュアル

1. 研修後の医師像と終了後に想定される勤務形態や勤務先

- 1) 地域医療における内科領域の診療医(かかりつけ医): 地域において常に患者と接し、内科慢性疾患に対して、生活指導まで視野に入れた良質な健康管理・予防医学と日常診療を実践します。地域の医院に勤務(開業)し、実地医家として地域医療に貢献します。
- 2) 内科系救急医療の専門医: 病院の救急医療を担当する診療科に所属し、内科系急性・救急疾患に対してトリアージを含めた適切な対応が可能な、地域での内科系救急医療を実践します。
- 3) 病院での総合内科(Generality)の専門医: 病院の総合内科に所属し、内科系の全領域に広い知識・洞察力を持ち、総合的医療を実践します。
- 4) 総合内科的視点を持った subspecialist: 病院で内科系の Subspecialty、例えば消化器内科や循環器内科に所属し、総合内科(Generalist)の視点から、内科系 subspecialist として診療を実践します。

2. 専門研修の期間

内科専門医は 2 年間の初期臨床研修後に設けられた専門研修(後期研修)3 年間の研修で育成されます。

3. 研修施設群の各施設名

(基幹病院)

甲南医療センター

(連携施設)

神戸大学医学部附属病院、神戸市立医療センター中央市民病院、加古川中央市民病院

神鋼記念病院、神戸赤十字病院、千船病院、大阪市立総合医療センター、淀川キリスト教病院

六甲アイランド甲南病院

4. プログラムに関わる委員会と委員、および指導医名

1) 研修プログラム管理運営体制

本プログラムを履修する内科専攻医の研修について責任を持って管理するプログラム管理委員会を甲南病院に設置し、その委員長と各内科から 1 名ずつ管理委員を選任します。

プログラム管理委員会の下部組織として、基幹病院および連携施設に専攻医の研修を管理する研修委員会を置き、委員長が統括します。

2) 指導医一覧

別途用意します。

5. 各施設での研修内容と期間

本プログラムでは専攻医が抱く専門医像や将来の希望に合わせて以下の 3 つのコース、①内科基本コース、②各科重点コース、③内科・サブスペシャリティ並行研修を準備しています。

Subspecialty が未決定、または総合内科専門医を目指す場合は内科基本コースを選択します。専攻医は、各内科学部門ではなく、総合医学教育研修センター(研修センター)に所属し、3 年間で各内科や内科臨床に関連ある救急部門などを 2 ヶ月毎にローテートします。

将来の Subspecialty が決定している専攻医は、各科重点コースを選択し、各科を原則として 2 ヶ月毎、研修進捗状況によっては 1 ヶ月～3 ヶ月毎にローテーションします。

基幹施設である甲南医療センターでの研修が中心になるが、関連施設での研修は必須であり、原則 1 年間はいずれかの関連施設で研修します。連携施設では基幹病院では経験しにくい領域や地域医療の実際について学ぶことができます。関連施設の詳細とプログラムは下記表1, 表2, 図1を参照のこと。

表 1. 専門研修施設群研修施設(2020 年 1 月実績、剖検数: 過去 3 年間の平均値)

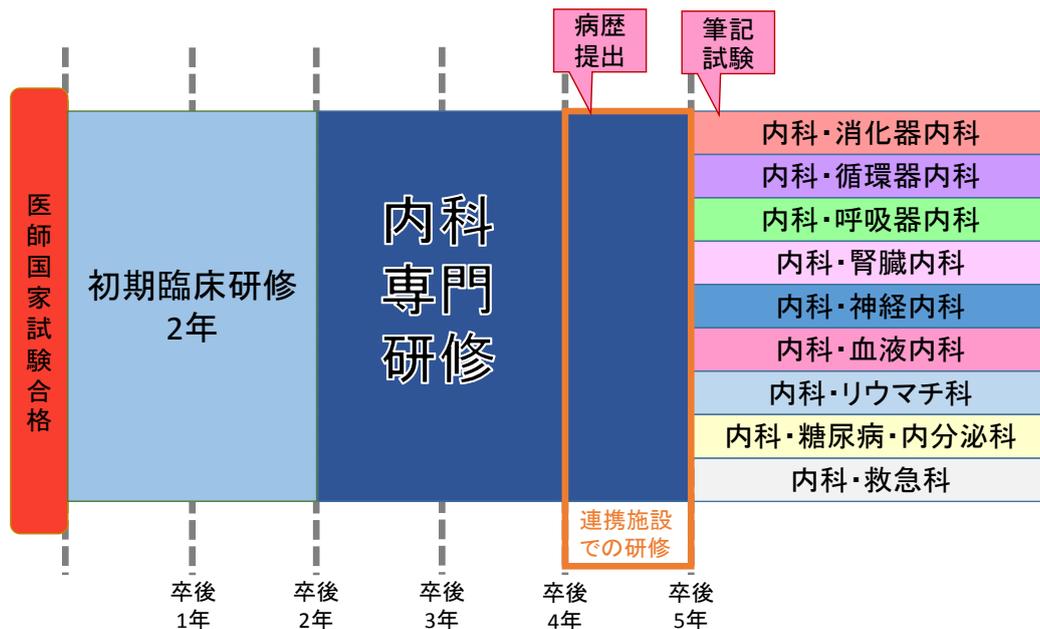
	病院	病床数	内科系 病床数	内科系 診療科数	内科 指導医数	総合内科 専門医数	内科 剖検数
基幹施設	甲南医療センター	380	190	9	21	18	13
連携施設	神戸大学医学部附属病院	870	269	11	70	61	23.3
連携施設	神戸市立医療センター	768	234	10	39	39	21
連携施設	加古川中央市民病院	600	209	9	40	27	11
連携施設	神鋼記念病院	333	168	9	28	18	8
連携施設	神戸赤十字病院	310	128	7	14	9	10
連携病院	千船病院	292	115	8	15	16	11
連携施設	大阪市立総合医療センター	1063	301	13	41	42	10
連携施設	淀川キリスト教病院	581	265	10	35	34	14
連携施設	六甲アイランド甲南病院	198	93	5	6	5	7

表 2.各内科専門研修施設の内科 13 領域の研修の可能性

病院	総合内科	消化器	循環器	内分泌	代謝	腎臓	呼吸器	血液	神経	アレルギー	膠原病	感染症	救急
甲南医療センター	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○
神戸大学医学部附属病院	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
神戸市立医療センター 中央市民病院	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
加古川中央市民病院	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○
神鋼記念病院	○	○	○	△	○	△	○	○	○	△	○	△	○
神戸赤十字病院	△	○	○	△	○	△	○	△	○	△	△	△	○
千船病院	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○
大阪市立総合医療センター	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
淀川キリスト教病院	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
六甲アイランド甲南病院	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	△	△	×

各研修施設での内科 13 領域における診療経験の研修可能性を 3 段階（○、△、×）に評価しました。

〈○：研修できる、△：時に経験できる、×：ほとんど経験できない〉



内科サブスペシャリティ専門研修も並行して研修可能

図 1. 甲南病院専門研修プログラム(概念図)

6. 主要な疾患の年間診療件数

内科専門医研修カリキュラムに掲載されている主要な疾患については、甲南病院(基幹病院)の DPC 病名を基本とした各内科診療科における疾患群別の入院患者数(H26 年度)を調査し、ほぼ全ての疾患群が充足されることが解っています(10 の疾患群は外来での経験を含めるものとします)。ただし、研修期間内に全疾患群の経験ができるように誘導する仕組みも必要であり、初期研修時での症例をもれなく登録すること、外来での疾患頻度が高い疾患群を診療できるシステム(外来症例割当システム)を構築することで必要な症例経験を積むことができます。

7. 年次ごとの症例経験到達目標を達成するための具体的な研修の目安

1) 内科基本コース(別紙1)

高度な総合内科(Generality)の専門医を目指す場合や、将来の Subspecialty が未定な場合に選択します。内科基本コースは内科の領域を偏りなく学ぶことを目的としたコースであり、後期研修期間の 3 年間において内科領域を担当する全ての科をローテーションします。原則として 2 ヶ月を 1 単位として、1 年間に 4 科、2 年間で延べ 8 科をローテーションし、3 年目は地域医療の経験と症例数が充足していない領域を重点的に連携施設で研修します。研修する連携施設の選定は専攻医と面談の上、プログラム統括責任者が決定します。

2) 各科重点コース(別紙2)

希望する Subspecialty 領域を重点的に研修するコースです。研修開始直後の 4 か月間は希望する Subspecialty 領域にて初期トレーニングを行います。この期間、専攻医は将来希望する内科において理想的医師像とする指導医や上級医師から、内科医としての基本姿勢のみならず、目指す領域での知識、技術を学習することにより、内科専門医取得への Motivation を強化することができます。その後、2 ヶ月間を基本として他科をローテーションします。研修 3 年目には原則 1 年間、連携施設における当該 Subspecialty 科において内科研修を継続し、Subspecialty 領域を重点的に研修するとともに、充足していない症例を経験します。研修する連携施設の選定は専攻医と面談の上、希望する Subspecialty 領域の

責任者とプログラム統括責任者が協議して決定します。なお、研修中の専攻医数や進捗状況により、初年度から連携施設での重点研修を行うことがあります。あくまでも内科専門医研修が主体であり、重点研修は最長 1 年間とします。また、専門医資格の取得と臨床系大学院への進学を希望する場合は、本コースを選択の上、担当教授と協議して大学院入学時期を決定します。

8.自己評価と指導医評価、ならびに 360 度評価を行う時期とフィードバックの時期

1) 専攻医による自己評価とプログラムの評価

日々の診療・教育的行事において指導医から受けたアドバイス・フィードバックに基づき、Weekly summary discussion を行い、研修上の問題点や悩み、研修の進め方、キャリア形成などについて考える機会を持ちます。

毎年3月に現行プログラムに関するアンケート調査を行い、専攻医の満足度と改善点に関する意見を収集し、次期プログラムの改訂の参考とします。アンケート用紙は別途定めます。

2) 指導医による評価と 360 度評価

指導医およびローテーション先の上級医は専攻医の日々のカルテ記載と、専攻医が Web 版の研修手帳に登録した当該科の症例登録を経時的に評価し、症例要約の作成についても指導します。また、技術・技能についての評価も行います。年に 1 回以上、目標の達成度や各指導医・メディカルスタッフの評価に基づき、研修責任者は専攻医の研修の進行状況の把握と評価を行い、適切な助言を行います。毎年、指導医とメディカルスタッフによる複数回の 360 度評価を行い、態度の評価が行われます。

9.プログラム修了の基準

専攻医研修 3 年目(内科・サブスペシャリティ並行研修は 4 年目)の 3 月に研修手帳を通して経験症例、技術・技能の目標達成度について最終的な評価を行います。29 例の病歴要約の合格、所定の講習受講や研究発表なども判定要因になります。

最終的には指導医による総合的評価に基づいてプログラム管理委員会によってプログラムの修了判定が行われます。

10. 専門医申請に向けての手順

日本内科学会専攻医登録評価システムを用います。具体的な入力手順については内科学会 HP から”専攻研修のための手引き”をダウンロードし、参照とする。

- 専攻医は全 70 疾患群の経験と 200 症例以上を主担当医として経験することを目標に、通算で最低 56 疾患群以上 160 症例の研修内容を登録します。指導医はその内容を評価し、合格基準に達したと判断した場合に承認を行います。
- 指導医による専攻医の評価、メディカルスタッフによる 360 度評価、専攻医による逆評価を入力して記録します。
- 全 29 症例の病歴要約を指導医が校閲後に登録し、専門研修施設群とは別の日本内科学会病歴要約評価ボード(仮称)によるピアレビューを受け、指摘事項に基づいた改訂をアクセプトされるまでシステム上で行います。
- 専攻医は学会発表や論文発表の記録をシステム上に登録します。
- 専攻医は各専門研修プログラムで出席を求められる講習会等(例:CPC、地域連携カンファレンス、医療倫理・医療安全・感染対策講習会)の出席をシステム上に登録します。

11. プログラムにおける待遇

専攻医の勤務時間、休暇、当直、給与等の勤務条件に関しては、労働基準法を順守し、甲南医療センターの専攻医就業規則及び給与規則に従います。専攻医の心身の健康維持の配慮については各施設の研修委員会と労働安全衛生委員会で管理します。特に精神衛生上の問題点が疑われる場合は臨床心理士によるカウンセリングを行います。専攻医は採用時に上記の労働環境、労働安全、勤務条件の説明を受けます。プログラム管理委員会では各施設における労働環境、労働安全、勤務に関して報告され、これらの事項について総括的に評価します。

12. プログラムの特色

本プログラムでは専攻医が抱く専門医像や将来の希望に合わせて以下の 3 つのコース、①内科基本コース、②各科重点コース、③内科・サブスペシャリティ並行研修を準備していることが最大の特徴です。コース選択後も条件を満たせば他のコースへの移行も認められます。また、外来トレーニングとしてふさわしい症例(主に初診)を経験するために外来症例割当システムを構築し、専攻医は外来担当医の指導の下、当該症例の外来主治医となり、一定期間外来診療を担当し、研修を進めることができます。

13. 継続した Subspecialty 領域の研修の可否

内科学における 13 の Subspecialty 領域を順次研修します。基本領域の到達基準を満たすことができる場合には、専攻医の希望や研修の環境に応じて、各 Subspecialty 領域に重点を置いた専門研修を行うことがあります(各科重点コース参照)。本プログラム終了後はそれぞれの医師が研修を通じて定めた進路に進むために適切なアドバイスやサポートを行います。

14. 逆評価の方法とプログラム改良姿勢

毎年3月に現行プログラムに関するアンケート調査を行い、専攻医の満足度と改善点に関する意見を収集し、次期プログラムの改訂の参考とします。アンケート用紙は別途定めます。

15. 研修施設群内で何らかの問題が発生し、施設群内で解決が困難な場合

日本専門医機構内科領域研修委員会を相談先とします。

甲南医療センター内科専門研修プログラム 指導医マニュアル

1. 専攻医研修ガイドの記載内容に対応したプログラムにおいて期待される指導医の役割

- 1 人の担当指導医(メンター)に専攻医 1 人が甲南病院内科専門研修プログラム委員会により決定されます。
- 担当指導医は、専攻医が web にて日本内科学会専攻医登録評価システムにその研修内容を登録するので、その履修状況の確認をシステム上で行ってフィードバックの後にシステム上で承認をします。この作業は日常臨床業務での経験に応じて順次行います。
- 担当指導医は、専攻医がそれぞれの年次で登録した疾患群、症例の内容について、都度、評価・承認します。
- 担当指導医は専攻医と十分なコミュニケーションを取り、研修手帳 Web 版での専攻医による症例登録の評価から研修の進捗状況を把握します。専攻医は Subspecialty の上級医と面談し、専攻医が経験すべき症例について報告・相談します。担当指導医と Subspecialty の上級医は、専攻医が充足していないカテゴリー内の疾患を可能な範囲で経験できるよう、主担当医の割り振りを調整します。
- 担当指導医は Subspecialty 上級医と協議し、知識、技能の評価を行います。
- 担当指導医は専攻医が専門研修(専攻医)2 年修了時までに合計 29 症例の病歴要約を作成することを促進し、内科専門医ボードによる査読・評価で受理(アクセプト)されるように病歴要約について確認し、形成的な指導を行います。

2. 専門研修プログラムにおける年次到達目標と評価方法、ならびにフィードバックの方法と時期

- 年次到達目標は、内科専門研修において求められる「疾患群」「症例数」「病歴提出数」に示すとおりです。
- 担当指導医は、研修管理委員会と協働して、4 か月ごとに専攻医の研修実績と到達度を適宜追跡、検討します。また、各カテゴリー内の研修実績と到達度が充足していない場合は該当疾患の診療経験を促します。
- 担当指導医は、研修管理委員会と協働して、4 か月ごとに病歴要約作成状況を適宜追跡し、専攻医による病歴要約の作成を促します。また、各カテゴリー内の病歴要約が充足していない場合は該当疾患の診療経験を促します。
- 担当指導医は、研修管理委員会と協働して、4 か月ごとにプログラムに定められている所定の学術活動の記録と各種講習会出席を追跡します。
- 担当指導医は、研修管理委員会と協働して、4 か月ごとに自己評価と指導医評価、ならびに 360 度評価を行います。評価終了後、1 か月以内に担当指導医は専攻医にフィードバックを行い、形成的に指導します。2 回目以降は、以前の評価についての省察と改善とが図られたか否かを含めて、担当指導医はフィードバックを形成的に行って、改善を促します。

3. 個別の症例経験に対する評価方法と評価基準.

- 担当指導医は Subspecialty の上級医と十分なコミュニケーションを取り、研修管理委員会での専攻医による評価を行います。

4. 日本内科学会専攻医登録評価システムの利用方法

- 専攻医による症例登録と担当指導医が合格とした際に承認します。
- 担当指導医による専攻医の評価、メディカルスタッフによる 360 度評価および専攻医による逆評価などを専攻医に対する形式的フィードバックに用います。
- 専攻医が作成し、担当指導医が校閲し適切と認めた病歴要約全 29 症例を専攻医が登録したものを担当指導医が承認します。
- 専門研修施設群とは別の日本内科学会病歴要約評価ボードによるピアレビューを受け、指摘事項に基づいた改訂を専攻医がアクセプトされるまでの状況を確認します。
- 専攻医が登録した学会発表や論文発表の記録、出席を求められる講習会等の記録について、各専攻医の進捗状況をリアルタイムで把握します。担当指導医と臨床研修管理委員会はその進捗状況を把握して年次ごとの到達目標に達しているか否かを判断します。
- 担当指導医は、日本内科学会専攻医登録評価システムを用いて研修内容を評価し、修了要件を満たしているかを判断します。

5. 逆評価と日本内科学会専攻医登録評価システムを用いた指導医の指導状況把握

専攻医による日本内科学会専攻医登録評価システムを用いた無記名式逆評価の集計結果を、担当指導医、施設の研修委員会、およびプログラム管理委員会が閲覧します。集計結果に基づき、甲南医療センター内科専門研修プログラムや指導医、あるいは研修施設の研修環境の改善に役立てます。

6. 指導に難渋する専攻医の扱い

必要に応じて、臨時で日本内科学会専攻医登録評価システムを用いて専攻医自身の自己評価、担当指導医による内科専攻医評価およびメディカルスタッフによる 360 度評価(内科専門研修評価)を行い、その結果を基に甲南病院内科専門研修プログラム管理委員会で協議を行い、専攻医に対して形式的に適切な対応を試みます。状況によっては、担当指導医の変更や在籍する専門研修プログラムの異動勧告などを行います。

7. プログラムならびに各施設における指導医の待遇

甲南医療センター給与規定によります。

8. FD 講習の出席義務

厚生労働省や日本内科学会の指導医講習会の受講を推奨します。指導者研修(FD)の実施記録として、日本内科学会専攻医登録評価システム(仮称)を用います。

9. 日本内科学会作製の冊子「指導の手引き」(仮称)の活用

内科専攻医の指導にあたり、指導法の標準化のため、日本内科学会作製の冊子「指導の手引き」(仮称)を熟読し、形式的に指導します。

10. 研修施設群内で何らかの問題が発生し、施設群内で解決が困難な場合の相談先

日本専門医機構内科領域研修委員会を相談先とします。

11)その他

特になし。

モデルプログラム(例:内科基本コース)

1. 研修目標

一般目標(GIO) : 内科領域全般に関して、Common diseaseから診断困難な疾患、複雑な疾患を有する患者に対応すべく、幅広い知識と高い診断能力を身につけ、診断がついていない患者に関して適切にマネジメントができること。侵襲の比較的小さい手技に関しては自ら行い、必要に応じて専門診療科・他の医療専門職と連携を取りながら、主治医として全人的に患者の診療を行えること。

行動目標(SBOs) :

- 1.Common diseaseに対する。エビデンスに基づいた標準的診断・治療を修得し実践できる。
- 2.病態生理学的な、或いは心理社会的に複雑な問題をかかえた患者に適確に対処できる。
- 3.簡潔かつ、適確で状況に応じたプレゼンテーションができる。
- 4.内科的な訴えで歩いて来院した一次救急外来患者に適切な初期診療ができる
- 5.基本的臨床検査(超音波検査、上部消化管内視鏡を含む)を理解し、実践できる。
- 6.現場の状況に応じた適確な身体診察法を実践し、指導できる。
- 7.病診連携・病々連携を適確に実践できる。
- 8.コメディカルとのチーム医療の重要性を理解し、実践できる。
9. 専門診療科や他科の医師との連携をとり、適確なコンサルテーションができる。
10. 予防医学、健康教育、高齢者ケア、緩和ケアが実践できる。

2. 研修内容

経験すべき疾患の抜粋

総合内科:初診、救急患者の診断と初期治療、Common diseaseの初期診察、患者指導、予防

不明熱など診断未確定な患者へのアプローチ

不定愁訴など心理的問題を抱えた方へのアプローチ

呼吸器: 市中肺炎、気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患、間質性肺炎、肺結核、肺癌など

血液: 急性白血病(診断)、悪性リンパ腫、MDS、再生不良性貧血など

アレルギー、膠原病:各種アレルギー疾患、各種血管炎、SLE、MCTD、ベーチェット

Sjögren症候群、皮膚筋炎など

循環器、消化器、糖尿病、神経内科は各領域を参照

経験すべき専門検査の抜粋

呼吸器: 胸部X線、CT 写真の読影、胸水穿刺、人工呼吸器管理など

血液: 骨髄穿刺など

循環器、消化器、糖尿病、神経内科は各領域を参照

経験すべき専門治療の抜粋

総合内科: 不明熱、原因不明の感染症や臓器障害など

呼吸器: 抗菌薬治療、喘息やCOPD 管理、一般的抗癌薬の使用など

血液内科 化学療法と、その合併症に対する治療、輸血療法など

循環器、消化器、糖尿病、神経内科は各領域を参照

3. 年次プログラム

循環器、消化器、糖尿病、腎臓、神経内科の専門医がひとつの内科に所属しており、臓器別専門医が一般内科を担当しながら、それぞれの専門領域の診療を行っています。一般内科と臓器別専門の研修と業務がシームレスに行われています。後期研修医は、総合内科、一般内科を主体とし、専門科の研修を段階的に深めていきます。後期研修 1、2年目では、すべての内科領域の救急を含めた外来診療と入院診療を担当します。外来で診療した症例は入院後も引き続き担当します。総合内科ではすべての専門領域の症例が入院し、いつでも必要に応じて各専門医の指導を受けることができます。

後期研修3年目以降は、糖尿病、循環器、消化器、老年、神経内科などの各専門領域を一定期間ごとに選択し研修することも可能です。専門研修では、それぞれの専門医に重点的に指導を受けます。救急疾患、循環器疾患、膠原病については連携する関連病院への一定期間の研修も選択することができます。

	目標	内容
1 年次	内科全般の診断、治療ができる。 JEMECC 受講	内科全般の診断、治療について研修。 内科各領域の診療経験。
2 年次	総合内科に加えて、神経、腎臓、消化器、代謝・内分泌、循環器各領域の代表的疾患を診断できる。	総合内科に加えて内科各専門領域について研修。内科専門医取得のための病歴提出準備。
3 年次	2 年目の研修内容の応用に加え超音波などの各検査手技に習熟し、初診、再診外来を担当。連携施設での診療経験。	総合内科、或いは希望に応じて専門領域について、専門医として対応できるレベルに到達できるように研修を行う。

なお、到達目標については、日本内科学会の研修プログラムのチェックリストに準じて適宜確認を行う。
下記表1を参照のこと。

その他、安全管理や感染セミナーを年2回以上受講。CPC の受講を行う。

※モデルプログラムとして紹介するこのコースでは連携施設での研修を 3 年目としていますが、連携施設での研修を何年目に行うのかはプログラムの任意となります。（最終的に修了要件を満たすことが重要です）

表 1 各年次到達目標

	内容	専攻医3年修了時	専攻医3年修了時	専攻医2年修了時	専攻医1年修了時	※5 病歴要約提出数	
		カリキュラムに示す疾患群	修了要件	経験目標	経験目標		
分野	総合内科Ⅰ(一般)	1	1※2	1			
	総合内科Ⅱ(高齢者)	1	1※2	1			
	総合内科Ⅲ(腫瘍)	1	1※2	1			
	消化器	9	5以上※1※2	5以上※1			3※1
	循環器	10	5以上※2	5以上			3
	内分泌	4	2以上※2	2以上			3※4
	代謝	5	3以上※2	3以上			
	腎臓	7	4以上※2	4以上			2
	呼吸器	8	4以上※2	4以上			3
	血液	3	2以上※2	2以上			2
	神経	9	5以上※2	5以上			2
	アレルギー	2	1以上※2	1以上			1
	膠原病	2	1以上※2	1以上			1
	感染症	4	2以上※2	2以上			2
	救急	4	4※2	4			2
外科紹介症例					2		
剖検症例					1		
合計※5	70疾患群	56疾患群 (任意選択含む)	45疾患群 (任意選択含む)	20疾患群	29症例 (外来は最大7) 3		
症例数※5	200以上 (外来は最大 20)	160以上 (外来は最大 16)	120以上	60以上			

※1 消化器分野では「疾患群」の経験と「病歴要約」の提出のそれぞれにおいて、「消化管」、「肝臓」、「胆・膵」が含まれること。

※2 修了要件に示した分野の合計は 41 疾患群だが、他に異なる 15 疾患群の経験を加えて、合計 56 疾患群以上の経験とする。

※3 外来症例による病歴要約の提出を 7 例まで認める。(全て異なる疾患群での提出が必要)

※4「内分泌」と「代謝」からはそれぞれ 1 症例ずつ以上の病歴要約を提出する。

例)「内分泌」2 例+「代謝」1 例、「内分泌」1 例+「代謝」2 例

※5 初期臨床研修時の症例は、例外的に各研修プログラムの委員会が認める内容に限り、その登録が認められる。(最大 80 症例を上限とすること。病歴要約への適用については最大 14 使用例を上限とすること。)

モデルプログラム(例: Subspecialty 重点コース 循環器内科)

当科は神戸市東部地区の循環器救急を 365 日 24 時間体制で受け入れています。またカテーテル治療の専門医、不整脈専門医が指導医として在籍しており PCI,EVT,カテーテルアブレーションのトレーニングがマンツーマンで受けられます。

研修内容は心筋梗塞、心不全、不整脈、弁膜症などの循環器疾患の患者を常時 10 名程度の主治医となり上級医の指導の下、循環器専門医を目指し症例を経験するとともに、心臓カテーテル検査、電気生理学検査、心エコー検査、救急外来にて急性冠症候群、心肺停止患者の初期対応を行います。

カテーテルカンファス、不整脈カンファレンス、エコーカンファレンスに参加や、臨床研究を行い少なくとも年に一回の国内、海外学会発表を行うこともすることも義務付けています。

当直は月に土日を含め 4 回あり、夜間、土日でも緊急カテコール(当番)で呼ばれることがあります。

トレーニングコースは1年目のファンダメンタルコースと3年目のアドバンスコースを設定しています。

ファンダメンタルコースは循環器科としての基本的な手技・知識(心臓カテーテル検査、心エコー、一次ペーシングカテ挿入、シンチ・CTCA、MRI 読影、心臓リハビリなど)を体験し学びます。

アドバンスコースは PCI、ペースメーカー植え込みなどの術者として経験を積んでいただきます。

2年目～3年目は連携施設での循環器研修もしくは内科研修となります。内科専門医に必要な症例を経験していれば循環器重点コースでの研修が可能です。いずれにしても最短で後期研修終了後2年目(卒後7年目)で循環器専門医取得を目指します。3年間の内科専門研修終了後は循環器科で更なるトレーニングを継続することも可能です。

(サブスペ)重点コース(例)												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年目	循環器ファンダメンタルコース											
2年目	関連施設での循環器(必要であれば内科研修)★											
3年目	循環器アドバンスコース★											
(4年目)	循環器科研修継続											
★週間予定(例)												
	月	火	水	木	金							
8:00				抄読会								
AM	心カテ	救急外来	心エコー	心カテ	シンチ							
PM	心カテ	カテーテルアブレーション	心カテ	心カテ	救急外来							
17:00	エコーカンファ	内科カンファ	循環器カンファ	不整脈カンファ	カテカンファ							

循環器志望で内科スーパーローテ場合(例)												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年目	内科ローテ						循環器ファンダメンタルコース					
2年目	関連施設での内科研修および循環器科研修★											
3年目	内科専門医研修											
	循環器アドバンスコース★											
(4年目)	循環器科研修継続											

★ 関連施設での研修は2年目もしくは3年目を予定。他の内科のローテは進捗状況、本人の希望を考慮して決める。

モデルプログラム(例: Subspecialty 重点コース 腎臓内科)

1. 研修目標

- 1) 腎臓疾患の診断のため必要な尿・血液検査をおこない、結果の解釈ができる。
- 2) 腎臓疾患の診断のため必要な画像診断をおこない、読影できる。超音波検査を自分で実施できる。
- 3) 腎生検の適応を決定し、指導者の監督のもと、自分で施行できる。
- 4) 代表的腎疾患の病理組織診断をおこなえる。
- 5) 各種腎疾患の治療計画をたて、治療をおこなえる。
- 6) 水・電解質・酸塩基平衡異常の病態を理解し、治療をおこなえる。
- 7) 末期腎不全症例に対し、腎代替療法開始の適応を決定できる。
- 8) 腎代替療法選択の説明をおこない、どの治療が良いか決定することができる。
- 9) 血漿交換、免疫吸着、二重濾過血漿交換など種々の血液浄化治療の適応を決定し、治療を施行できる。
- 10) 内シャント形成手術の適応を決定し、指導者の監督のもと自分で手術ができる。
- 11) ブラッドアクセスカテーテル挿入の適応を決定し、自分で手技をおこなえる。
- 12) シャントトラブルに対して PTA の適応を決定し、治療をおこなえる。
- 13) 腹膜透析カテーテル留置手術の助手をつとめることができる。
- 14) 血液透析治療条件を指示し、シャントの穿刺をおこなえる。
- 15) 透析患者に必要な薬剤処方をおこない、合併症管理をおこなえる。
- 16) 腹膜透析患者の管理をおこなえる。
- 17) 腎臓・血液浄化に関する症例報告、臨床研究の報告ができる。

2. 研修内容

蛋白尿から維持透析までの一貫した腎疾患診療をおこなっており、専攻医は幅広い腎臓内科研修を受けることができる。当科では年間約 20 件の腎生検をおこなっており、腎病理専門医の診断にもとづいて、カンファレンスをおこない治療方針を決定している。これら腎炎・ネフローゼの治療以外にも、慢性腎臓病の患者教育、外来管理をおこない、末期腎不全症例に対しては看護師と協力して療法選択説明をおこなうようにしている。血液透析導入にあたっては、あらかじめシャント手術をおこない透析導入に備えている。当院では腹膜透析の導入管理もおこなっており、腹膜透析関連手術も当科で施行している。また、約 100 名の維持透析患者を管理しており、適切な透析条件の設定や合併症の予防と治療をおこなっている。勿論のことではあるが、急性腎不全、水電解質異常への対応や血漿交換などのアフターケア治療も当科が担当している。

年次プログラム

	内容	目標
1-2 年次	将来腎臓内科専攻を希望する場合、最初の 4 か月は甲南病院において腎臓・透析を中心とした研修をおこなう。その後は基本的には 2 か月毎にその他の領域の研修をおこなう。	内科医としての基本姿勢を学び、腎臓・透析に対する興味を深める。そのうえで他領域の疾患についての知識も習得する。
3 年次	兵庫医科大学、神戸大学といった連携施設において腎臓・透析の研修を中心に内科研修を継続する。	腎臓・透析に関する基本的知識と技術を習得し、腎臓内科研修目標を達成し、将来の専門医取得に備える。

●週間スケジュール

血液透析：月～土 / 腹膜透析外来：月～金 / 手術：火曜、水曜 / PTA：火曜

血液透析総回診：月1回 / 腹膜透析カンファレンス：月1回 / 腎生検カンファレンス：適宜

内科会：月曜 / 内科症例検討会：火曜

モデルプログラム(例: Subspecialty 重点コース 血液内科)

1. 研修内容

血液学会血液研修施設に認定されており良性から悪性まで幅広い血液疾患の診療に携わることができます。当科は 2019 年 10 月よりクリーンルームが稼動し、大量化学療法、自家造血細胞移植が必要な症例にも対応していきます。外来を担当することで入院することが稀な疾患や造血器腫瘍への初期対応を学ぶと共に診断から加療までの一連の流れを担当医として経験できます。

骨髄穿刺・生検、中心静脈カテーテル挿入・留置、腰椎穿刺などの血液内科医として基本的な手技は血液専門医の指導により日常診療業務の中で身につきます。腫瘍内科医と合同でカンファレンスを行っており造血器腫瘍に限らず悪性腫瘍一般に対する基本的な考え方を理解し担当症例で実践し習得していきます。

当直、救急外来などの対応で一般内科医としての実力もつけながら、症状が多岐にわたる血液疾患を診療できる専門医を目指せます。

モデルプログラム(例: Subspecialty 重点コース 消化器内視鏡)

募集専攻医数

下記 1)～3)により、甲南医療センター消化器内視鏡専門医研修カリキュラムで募集可能な消化器内視鏡専攻医数は 1 学年2名とします。

1)甲南医療センター消化器内科後期研修医は現在 3 学年併せて5名で 1 学年1, 2名の実績があります。

2)甲南医療センター 診療科別診療実績

(消化器内科として 2018 年度実績)

入院検査・治療件数	1043
外来検査・治療件数	2456
上部消化管内視鏡 検査件数	2323 (そのうち治療件数 171)
大腸内視鏡 検査件数	1137 (そのうち治療件数 468)
ERCP 検査件数	155 (そのうち治療件数 131)
内視鏡検査・治療 総数	3841 (すべて件/年)

上記表の件数は日本消化器内視鏡学会が定める、専門研修基幹施設としての要件を充足する、指導施設です。

4.専門知識・専門技能の習得計画

1)到達目標

- ① 3 年以上の専攻医研修期間で、以下に示す消化器内視鏡専門医受験資格を完了することとする。
- ② 領域経験症例数として規定されている上部消化管内視鏡検査・治療を 1000 例、下部消化管内視鏡検査を 300 例、指導医の下で安全に経験すること。
- ③ 研修終了時点で研修手帳に定めた症例のうち 80%を経験し、JED に登録すること(甲南病院は 2019 年 10 月以降 JED 導入予定であり、それまでは従来の様式により症例のカウントを行う)。かつ、可能な限り研修手帳に定めた疾患を経験すること。
- ④ 技能・態度:領域全般について診断と治療に必要な検査所見解釈、および治療方針を決定する能力、専門医としてふさわしい態度、プロフェッショナリズム、自己学習能力を修得すること。
なお、習得すべき疾患、技能、態度については多岐にわたるため、専攻医手帳を参照してください。

消化器内視鏡学会の専門研修は期間を明確には定めていません。専門研修基幹施設、専門研修連携施設のおこなっている検査件数や診療形態がさまざまであるため、期間を厳格に規定するのではなく、専門研修期間中に知るべき知識と、自身が実施医として行う内視鏡診療の経験症例数を厳格に規定し、その質を担保する形態としています。

下記の研修プロセスにおける年限はあくまで目安であることにご注意ください。

○専門研修 1 年

知識: 総論で規定された事項に関する知識を、内視鏡診療の場で、実地経験をしながら学んで行く。自身が施行する内視鏡検査にかかわる疾患だけではなく、指導医が行う検査・治療にも介助者として立会い、規定された症例に対する知見を蓄積する。

技能: 内視鏡検査において主実施医として施行できる基礎を形成する。主に上部消化管内視鏡検査を行い、下部消化管内視鏡検査の習得も開始する。胆膵内視鏡検査、各種治療内視鏡においては積極的に介助者として関与する。

態度: 専攻医自身の自己評価、指導医ならびにメディカルスタッフによる評価を受け、担当指導医がフィードバックを行う。洗浄、消毒、検査・治療に対する介助などメディカルスタッフが通常行う業務に関しても必ず経験することを義務付ける。

○専門研修 2 年

知識: 一年次から継続し、研修カリキュラムで規定された疾患、症例に対する知見を蓄積する。

技能: 内視鏡検査に加え内視鏡治療手技、ならびに高度な手技に関して主実施医として施行できる基礎を形成する。上部消化管内視鏡検査においては自己完結できることを必須とし、下部内視鏡検査に関しても自己完結できるスキルを目指す。胆膵内視鏡検査、各種治療内視鏡においても介助者としてのみならず主実施者として行う。

態度: 専攻医自身の自己評価、指導医ならびにメディカルスタッフによる評価を受け、担当指導医がフィードバックを行う。

○専門研修 3 年

知識: 消化器内視鏡専門医研修の総まとめとして、経験症例とし規定されたもののなかで経験のないものがあれば、担当指導医に報告し、積極的に触れるようにする。

技能: 消化管内視鏡検査においては自己完結できる状況になることを目指す。また偶発症に対しても対処を含めた知識と技能を身につける。

態度: 専攻医自身の自己評価、指導医ならびにメディカルスタッフによる評価を受け、担当指導医がフィードバックを行う。

専門医研修カリキュラムに定める内容、すなわち、実施医として上部内消化管視鏡検査を 1000 例、下部消化管内視鏡検査を 300 例経験することとし、JED にも経験症例を登録します。かつ、研修管理委員会が専攻医の知識、スキル、態度それぞれについて総合的に審査します。知識レベルもカリキュラムの達成度に応じて指導医が判断し、経験の有無を確認します。

甲南病院消化器内視鏡専門研修施設群
(地方型一般病院の研修モデル)
研修期間:3年間目途

■ 消化器内視鏡専門医単独研修コース(週間スケジュール例)

	月	火	水	木	金
午前	モーニングカンファレンス				
	上部消化管内視鏡	上部消化管内視鏡	外来	超音波内視鏡	腹部エコー
午後	下部消化管内視鏡	下部消化管内視鏡	治療内視鏡	治療内視鏡	下部消化管内視鏡

■ 消化器病専門医と消化器内視鏡専門医の並行研修コース(週間スケジュール例)

	月	火	水	木	金
午前	モーニングカンファレンス				
	上部消化管内視鏡	上部消化管内視鏡	外来	超音波内視鏡	腹部エコー
午後	下部消化管内視鏡/ 病棟	下部消化管内視鏡	治療内視鏡/ 外科との合同カンファレンス	治療内視鏡/ 病棟	下部消化管内視鏡/ 消化器内科カンファレンス

- 病棟での研修は消化器病を中心に、内視鏡の研修は内視鏡担当部署で行います。
- 消化器病専攻医は、上部消化管内視鏡検査を週に2コマ、腹部超音波検査を行います。上部消化管内視鏡検査に関しては消化器内視鏡における研修としています。
- 午後は複数の医師で行う消化器疾患の検査・治療を消化器指導医の監督のもとに協力して行い、週2コマ程度の下部消化管内視鏡検査を行います。
- 原則として週に1度、消化器内科内において外来患者、入院患者について症例検討会を実施します。外科的治療の適応がある患者については消化器外科医との症例検討会を行います。

■ 消化器内視鏡専門医と肝臓専門医との並行研修コース(週間スケジュール例)

	月	火	水	木	金
午前	モーニングカンファレンス				
	上部消化管内視鏡	上部消化管内視鏡	外来	超音波内視鏡	腹部エコー
午後	下部消化管内視鏡/ 病棟	病棟	下部消化管内視鏡/ 外科との合同カンファレンス	経皮的治療(肝処置)	血管造影・治療/ 消化器内科カンファレンス

- 病棟での研修は肝臓を中心に、内視鏡の研修は内視鏡担当部署で行います。
- 上部消化管内視鏡検査、下部消化管内視鏡検査は週に2コマずつです。
その他のコマの使用の仕方では並行研修プログラムはフレキシブルになります。
- 内科系他学会の主な業務は病棟での診療と外来担当と思われるため、上記の出番表の組み方で対応は可能です。

年次プログラム

甲南医療センターの内科専門医プログラム(Subspecialty重点コース)

専攻 医研 修	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 年 目	各専門領域にて初期トレーニング				他内科1		他内科2		他内科3		他内科4	
5月から1回/月のプラマリケア当直研修を6ヶ月間行う												
1年目にJMECCを受講												
2 年 目	他内科5		他内科6		他内科7		他内科8		他内科9		予備(充足していない領域をローテーション)	
内科専門医取得のための病歴提出準備												
3 年 目	専門領域/連携施設 (subspecialty重点期間は1年目の4ヶ月と合算して最長1年間とする)											
初診+再診外来週に1回担当												
その他プログラム	安全管理セミナー、感染セミナーの年2回の受講、CPCの受講											
他科ローテーションについて	最初の4ヶ月は所属科にて基本的トレーニングを受ける。その後、他科を原則として各2ヶ月間ローテーションする。 ローテーションの順序は研修センターが決定するが、充足状況などを勘案し、2年目最後の2ヶ月に不足科をローテーションする。 ローテーション中は当該科の指導医が研修指導する。											

連携施設

神戸大学医学部附属病院, 神戸市立医療センター中央市民病院, 加古川中央市民病院
 神鋼記念病院、神戸赤十字病院、千船病院、大阪市立総合医療センター、淀川キリスト教病院
 六甲アイランド甲南病院